白馬村遺跡分布調査報告書

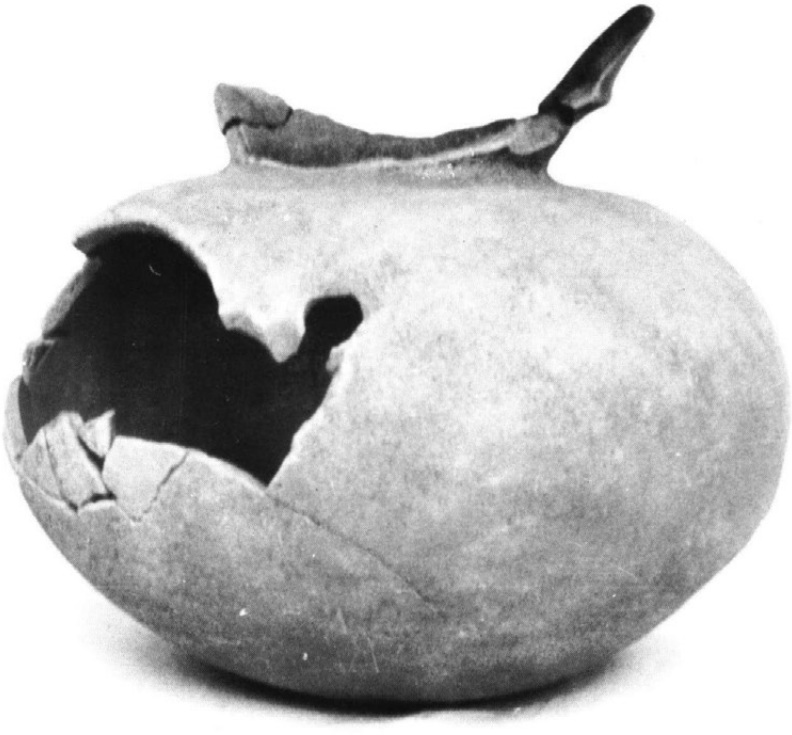
◆·白馬の文化財第一集·◆

白馬村埋蔵文化財分布調査委員会
白馬村教育委員会 編

信州大学人文学部

白馬村遺跡分布調査報告書

·◇白馬の文化財第一集◇·



〔写真〕白山城址より出土の五領式土師器
高さ15cm　口縁部直径12cm
松沢宗雄氏　所蔵

序

自然破壊・観光公害等、開発行為の見直しがさけばれつつあるこの期に、白馬村遺跡詳細分布調査報告書が白馬村文化財第一集として発刊できたことは、新たな創造と環境を求めてステップを刻んでいかなければならない本村にとって、大きな励みとなることと信じております。

先人の文化を守り、後世に伝えていくことは現代に生きる者のつとめであります。ある有識者は「観光地とはすぐれた文化を有するところだ」といっております。本村においてもまだまだ埋れた有形・無形の文化がありますが、これを見い出し、その価値を広く知らしめることは社会的に重要なことであると思われますので、今後も文化財保護あるいは調査についても皆様の一層の御理解をいただきたいものです。

調査にあたられました関係者及び土地・遺物の所有者の方々には、厚くお礼申し上げます。

白馬村教育委員会

目　　次

例　　言 …… 5

発刊にいたるまでの経過 …… 8

白馬村の自然環境 ― I 気候・動植物相 ―…… 8
― II 地　形・地　質 ―……12

遺跡地名表 ……17

遺跡と遺物 ……47

結　　語 ……77

白馬村遺跡調査体制……80

あとがき……82

例　　言

1．本遺跡分布調査報告は、長野県北安曇郡白馬村の埋蔵文化財包蔵地（遺跡）を対象としたものである。ただし今回は、山城址・居館址・寺院址・中世以降と考えられる祭址・葬送関係の遺跡は除外した。

2．本報告は、白馬村教育委員会の委託を受けた調査団（団員名別項）がまとめたもので、作業は、実地調査および遺物の実見を原則とし、協同作業によった。

3．村内遺跡遺物を網羅することを願ったが、調査の及ばなかった地域や、散逸してしまって実見することのできなかった遺物もあった。

4．調査の基本は、春日賢一・江口善次・猿田文紀氏ら先学の業績に負うところが大きかった。

5．遺跡番号は村内遺跡を通し番号とし、姫川右岸を南より北に、続いて左岸を南より北に追う形をとった。古墳群は一群を一番号とし、古墳の項においてさらに一基ごとの番号を付した。村内遺跡番号の下に（県埋文地図番号）〔信濃史料番号〕を付けた。村内遺跡番号は、今回の調査団が付けたので、県埋文・信濃史料の番号と順序が異なりさらに遺跡数も増加している。

6．遺跡名は、原則として小字名とし、土地での呼称をよみがなとして付けた。また同一小字名をもつ遺跡には部落名を冠してある。

7．所在地は地番まで記載することを願ったが、できなかった遺跡もある。

8．種別は包蔵地　古墳（群）とした。範囲は実測によるものもあり、歩測、目測によったものもある。しかし節囲は確定するのに困難な点があるので、ここにあげた数字は必ずしも確実なものではない。

9．時期については、旧石器・縄文・弥生・古墳時代・中世紀以降とし、若干の異説のあることは承知の上で、わかる限りの型式名を記載した。

10．位置・地形については、遺跡の所在位置と立地条件を明らかにすることに留意した。

11．備考欄には文献名を記載したが、その遺跡の調査歴までは明らかにすることができなかった。

12．遺跡分布地図には下記の記号により、遺跡の所在地と、およその範囲を示した。

……包蔵地

……古墳・古墳群

発刊にいたるまでの経過

白馬村はかっては雪深い辺ぴな農山村であったが、経済の高度成長とともに訪づれた観光開発ブームによりここ15年程の間に大きく変貌をとげるに至たりました。

特に昭和40年代前半からの別荘団地開発、スキー場の造成、そして40年代後半から始まった農業基盤整備事業道路改良などのため土地の形質は広範囲に変形されつつあります。

村内にもいくつかの遺跡・遺物があることは村内外の研究者、識者により判ってはおりましたが、広く村民の中に位置づけられていたとはいえない状況でした。

これは寒村であった白馬村が今日のような、観光村になるまでの経過の中では古代文化というような非現実的な面までは手を回す余裕がなかったというのが実情でした。

このような中で除々に民俗資料的なものを中心として歴史的なものへの関心が文化祭などを通じて村民の中に高まってきました。

これは開発行為などで失なわれるものへのうずきとも郷悠とも感じられますが、こういった村内の雰囲気を背景として今回の調査を始めるに至った引き金となったものに52年に行われた小丸山遺跡の発掘調査がありました。小丸山遺跡の発見はたまたま小丸山が土取場となっていたため、土を削った断面を当時白馬高教諭であった百瀬先生が見て住居跡を発見したものですが、これを発掘する過程において調査にたづさわった先生方の中から、この際白馬村内全域にわたって調査をすべき必要がある旨声があがりました。教育委員会においてもこれ以上観光開発、農用地整備が進展しないうちに調査すすめる必要性を感じたので良い機会ということで52年度に県に補助申請をし53年度において国庫補助事業として調査の運びとなったものです。

調査を始めるにあたって幸いなことには、村の小中高校に古代文化や地質あるいは民俗学等の専門の先生方がおられたということで、調査決定が急であったにもかかわらず比較的スムースに調査体制ができあがったということです。

調査団は白馬北小の篠崎先生を団長、大町北小の松倉先生を副団長として白馬中田中・白馬高畑田・金原、そして白馬高から転出された百瀬の各先生を団員として構成されました。調査は５月の中旬から開始されましたが、雪の早い当村では11月中旬までには現地調査を終らせなければならないということから、お忙しい各先生方には日程的にかなり無理をお願いする結果となってしまった。しかしながら、すでにほとんどの地区については団員の先生方が過去に調査されてあったもので、これにより僅か７ヶ月の期間で一通りの現地調査ができえた訳であります。

また調査期間中に小中高校の生徒の協力をえたことにより遺物の収集、古墳の発掘がスムースにいったことも大きな力でした。

残念であったことは、農業基盤整備で白馬村には珍らしい弥生式の遺物が出土する白山城址が壊滅してしまったこと。また遺跡の真上に家が建てられてあったことなどごく最近の出来事であっただけに、行政的な連絡あるいは遺跡というものの村民へのＰＲ、社会教育における取

り組みかた等悔いが感じられました。

この報告書は村内全域にある遺跡の紹介という程度のものでありますが、調査の間においては、地主の方、遺物の所有者に御協力を頂いた賜ものといえます。これを契機に古代の文化についての興味がたかまりゆくならばさらに詳しい報告書の必要性も生じ、遺跡保護の声も広く沸いてくることと思います。

またそうさせなくてはならないものと感じます。

白馬村の自然環境

Ⅰ　気候と動植物相

1．気温決定基本要素と概況

その土地の気象は、その土地をとり巻く地理的条件によって決まる。地理的条件には緯度・標高・地形を始め、海からの距離・海流・季節風の影響など、諸々の要素が重なり合い関係し合い複合体として現れるものであり、さらにこれらの気象条件や土壌条件などによって植物や動物は、それぞれ適地を選び「住み分け」をしているもので、地区の植物相（動物相）を見ることにより（被度頻度などにより）その地域の気候条件（生活環境条件）を知ることができるという、相関関係を持っているものである。

先ず気候要件の中心であり、植生要件の中心でもある気温について、その決定要素についてみると、

(1)　緯　　度

気温は基本的には地理的位置によって決まるといってよい。北に寄るに従い日射量が減る関係で、緯度１度北に寄るに従い、年平均で0.9度低くなるとされている。（第１表参照）

白馬村は北緯36°42′であるから、県南部の飯田（35°31′）や高遠（35°50′）より気温は１度近く低くなることになる。

(2)　標　　高

緯度に次いでの気温要素は標高である。標高の場合は100ｍにつき約0.57度の差を生ずるといわれている。（第１表参照）白馬村の集落は650～800ｍの間にあり、日本でも比較的高い位置にあるといわれているが、飯田市（481ｍ）長野市（418ｍ）松本市（600ｍ）と比べて0.6～1.7度低いことになり、緯度標高を加味した温度差を計算すると、飯田市より３度、同じ標高の高遠と比べても１度低いことになり、この１度という数字は植物にとっては大事な温度で、ちなみにさくら前線を比較してみても、飯田４月７日、高遠４月18日、松本４月13日、長野４月14日に対し白馬村では例年４月下旬で、飯田より20日以上、高遠より10日も遅れて開花している。

(3)　地　　形

地形も気象に大きく影響する。白馬村は周囲を山に囲まれ、小盆地状地形をなし、海からも遠いので内陸性気候を示し、日中は比較的高温であるが、夜間は温度の放出が激しく夏季は涼しいけれど冬季晴天の夜の冷え込みはきびしいものがある。

また北方は日本海に向い姫川渓谷が廊下状に口を開け、西方も距離的には海に近いのでいわゆる裏日本型気候とよばれる気候の影響を受け、雪積は多いが植生等を見る時質的に

はあまり強い影響を受けていないことが解る。

(4) 季節風と雪

冬季シベリヤ大陸上空に発達した高気圧は日本海を渡る時大量の水蒸気を含み、これが北アルプスに衝突し冷却して周辺に多量の雪を降らせる。白馬村全域はこの雪の影響下にあり、この時期は北西の風が強く冷え込みがきびしい。

2．降　水　量

郡の統計から見ると、佐野坂を境にして北部は南部に比し降水量が多く、年間2,000㎜に近い数字を示している。これは大町市より700㎜多く、又、長野市の2倍に値する量である。この数値を月別に検討してみると、夏期も多いが特に冬期に多いのは雪によるものである。

しかし快晴日数は他地区と同じであり、曇天日数は松本や長野よりむしろ少ない統計となっていることは、集中豪雨型の雨が多いことを物語っている。

雪については白馬村は本場であり、佐野坂峠を境として北部に多く、雪のある期間は例年11～4月の間105～115日、最深雪積量は、180～240㎝を記録している。

3．気候的特長と動植物相

以上大まかに白馬村の気候と地理的要素の特長を述べたが、これらを要約してみると、

(1) 緯度が低く標高が高いので夏は冷涼ですごしやすいが冬季はきびしい寒さに襲われマイナス20度以下になることもある。

(2) 降雪が多く積雪期間は100日以上に達し、年間降水量は2,000㎜に近い。

(3) 裏日本型気候と内陸性気候の接点に位置しているので両者の気候が入り混って現れる。

ということができる。

このような特長は最初にも述べた通り、気候に敏感な動植物にとって、やはりそれなりの適応を示し、また社会を形成している。

その特長的な例を植物にとり2～3挙げてみると、

(1) 暖帯系植物が育たない。

平均気温が低く冬の寒さがきびしいので、サルスベリ・カキ・ヒイラギ・ヤブツバキ・シイ・カシなどの長野市や大町市で育っている暖帯系やそれに近い植物がほとんど育たない。しかし夏作物である水稲などは開花期とそれ以後の低温障害に逢わない場合は、夜間の冷涼はかえって生育に適しているといえる。

(2) 寒さに強く多湿を好む植物に適している。

年間2.000㎜に達する降水量は、土壌との関係もあるがスギ・イチイなどの生育に適し佐野坂から小谷村にかけては秋田に比適する杉の美林地帯を形成している。

(3) 裏日本型植物

裏日本型気候を代表する、ユキツバキは小谷村南小谷の辺までが生育限界であるが、その影響は少なくなるとはいっても佐野坂峠近くまでは、オオイタドリ・サンカヨウ

シラネアオイ・ハイイヌツゲ・チャボガヤ・カライトソウ・オオバツツジ・ツルシキミ・エゾユズリハなどの、裏日本を特長づける植物がみられる。

(4) 温帯～寒帯動植物がみられる。

白馬岳を主峰とする高岳を持つ白馬村は、平地から低山帯にかけてはマツ・スギ・クリナラ・シラカバ・トウホクノウサギ・ムササビなどの温帯系動植物、それから上部はオオシラビソ・ダケカンバ・ゴゼンタチバナ・マイズルソウ・カモシカなどの亜寒帯、さらに2,000 m を超える高山ではハイマツ・コマクサ・ウルップソウ・ハクサンイチゲ・シナノキンバイ・ライチョウ・オコジョなどの寒帯の動植物と垂直的に巾広い動植物相がみられる。

（長　沢　　武）

参考文献

北安曇誌編纂委員会「北安曇誌第1巻自然」第4編　気候　1967
長野県天文気象教育研究会「信州の天気」信濃毎日新聞社　1978

表1　　気温差の計算表

月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
緯度1度についての気温変化℃	1.2	1.1	1.1	0.9	0.9	0.8	0.7	0.6	0.7	0.8	0.9	1.0
高度1,000mについての気温変化℃	5.6	6.0	5.6	5.5	5.4	6.0	6.2	6.4	5.8	5.6	5.1	5.3

表2　　最高低気温の平均と年較差（1953～1967）

観測所	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	全年	年較差
中土	−3.5	−3.4	0.7	6.5	12.6	16.8	21.5	22.7	17.8	11.0	4.3	−0.2	8.9	26.2
南小谷	−2.0	−1.0	2.6	9.9	14.9	18.8	23.3	24.4	20.9	13.7	7.6	2.4	11.3	26.4
北城	−3.9	−3.5	0.6	7.7	13.5	17.8	22.2	23.3	18.6	11.9	5.9	−0.2	9.5	27.2
神城	2.9	−2.1	1.3	8.5	13.3	17.6	21.5	22.6	19.3	12.5	6.5	0.2	9.9	25.5
大町	−2.8	−2.4	1.8	8.6	13.8	18.2	22.1	23.4	18.9	12.3	6.4	0.8	10.1	26.2
池田	−1.8	−1.1	3.2	9.6	14.4	19.2	23.3	24.3	19.7	13.1	7.0	1.7	11.1	26.1
豊科	−1.4	−1.0	3.4	9.9	15.0	19.7	24.0	24.6	20.0	13.2	7.1	1.7	11.3	26.0
松本	−1.5	−1.1	3.2	9.7	14.8	19.4	23.7	24.3	19.8	13.2	7.1	1.8	11.2	25.8
飯田	0.6	1.4	5.2	11.4	15.8	20.0	24.4	25.2	21.2	14.7	8.8	3.5	12.7	24.6
長野	−1.4	−0.7	3.4	10.2	15.3	20.0	23.3	25.4	21.4	13.9	7.7	2.1	11.7	26.8

表3　　月別降水量（1967：累年平均）

観測所	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	全年
南小谷	256	181	146	126	126	176	234	156	198	132	126	246	2103
北城	180	129	135	139	141	207	260	164	203	128	110	184	1980
大町	64	63	83	97	103	165	175	136	171	114	66	78	1315
池田	42	67	72	94	100	154	145	133	167	118	54	49	1195
豊科	40	52	72	92	94	146	136	117	162	111	59	44	1125
松本	39	48	71	88	92	148	129	114	138	118	58	39	1082
飯田	66	76	119	147	143	232	211	162	200	151	86	68	1661
長野	56	50	56	70	79	112	144	104	127	92	50	58	998
富山	286	180	157	134	137	162	227	168	255	182	180	303	2370
甲府	38	49	72	85	90	140	143	156	188	137	67	43	1207
浜松	56	77	134	181	180	253	204	202	379	184	111	72	1933

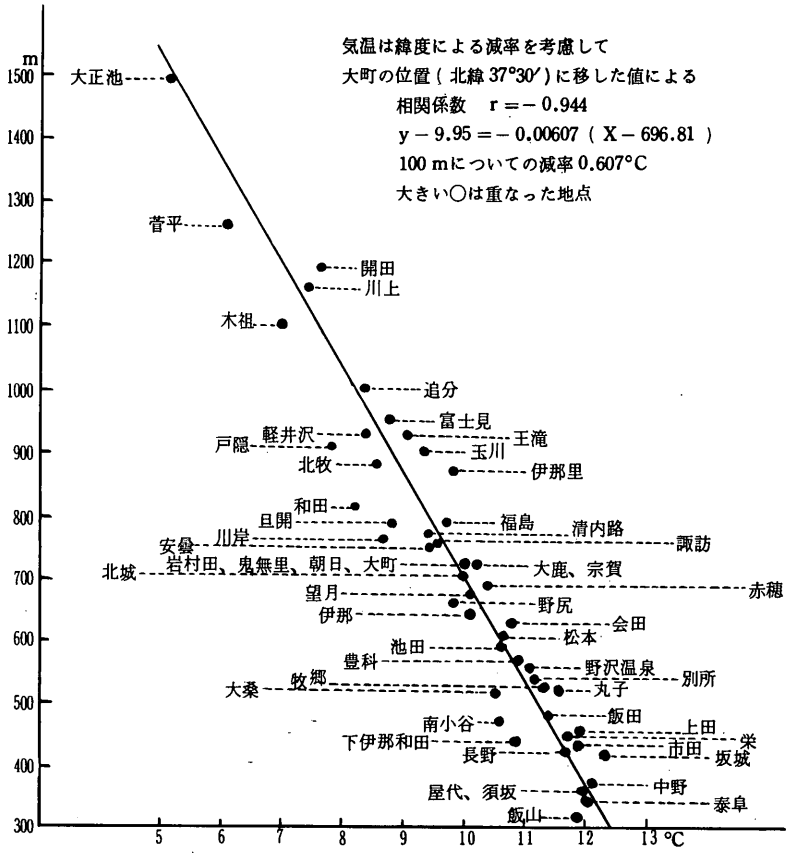


図　標高と年平均気温

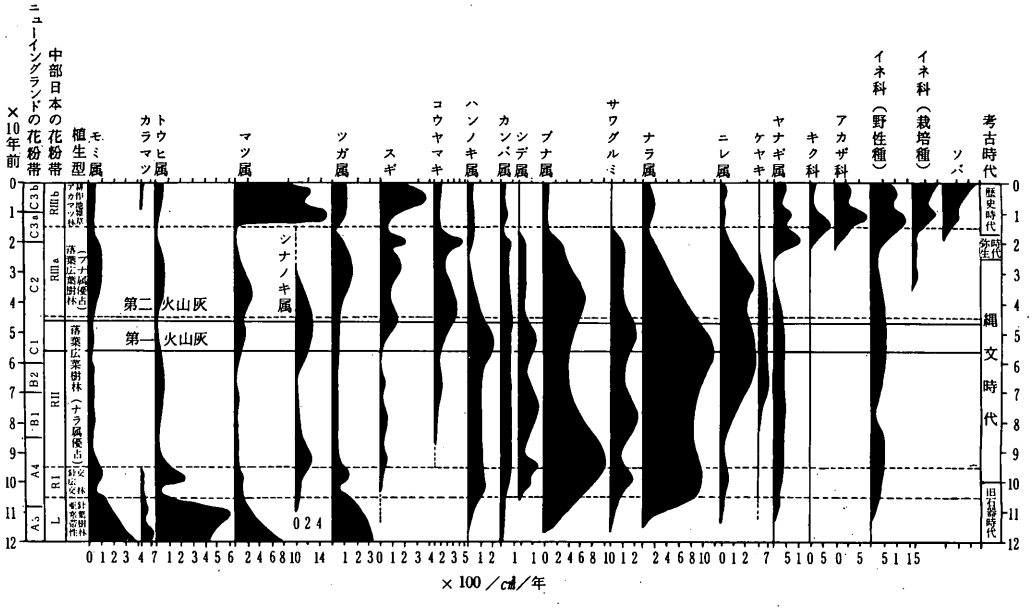


図　野尻湖の絶対花粉分布図（塚田，1972）

図2　時代による気候の変遷

絶対年	一五、〇〇〇	一四、〇〇〇	一三、〇〇〇	一二、〇〇〇	一一、〇〇〇	一〇、〇〇〇	九、〇〇〇	七、五〇〇	六、〇〇〇	四、五〇〇	二、五〇〇	一、五〇〇	現在
時代	洪積世（晩氷期）					沖積世（後氷期）							
花粉分析区分	L花粉帯					R_{I}	R_{II}			R_{IIIa}		R_{IIIb}	
地学区分年代	ドリアス期	最古期	旧ドリアス期	アレレード期	新ドリアス期	先ポレアル期	ポレアル期	アトラント期		亜ポレアル期	亜アトラント期		
気候変化	寒		寒	暖	寒	温	寒	暖		寒	寒冷涼	温	
植生変化	氷河融け始める		日本列島海面上昇	モミ・ツガ・トーヒ優占		融け終る	ブナ・ナラ属優占種	温帯林現在より400m上昇		亜寒帯森林200m下降する			
考古学的区分	後期旧石器		中石器			新石器				青銅器	鉄器		
					草創期	縄文早期	前期	中期	後期	晩期	弥生	古墳	

表4　月別快晴日数（1958～1967平均）

観測所	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	計
南小谷	5	6	8	9	11	5	7	11	5	8	8	7	90
北城	4	8	9	9	10	6	7	11	5	8	7	6	90
大町	7	8	9	9	9	5	5	10	5	9	10	10	96
池田	7	7	8	8	9	3	6	9	4	7	6	9	83
豊科	8	8	9	9	9	5	8	11	5	7	8	10	97
松本	9	10	9	8	8	4	6	12	5	9	9	12	101
飯田	13	13	11	8	9	4	5	10	6	7	7	13	106
長野	8	7	8	8	8	4	5	10	5	8	7	8	86

表5　月別曇天日数（1958～1967）

観測所	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	計
南小谷	22	16	17	16	14	16	16	11	16	16	15	19	194
北城	21	15	15	14	15	17	16	12	16	16	16	17	190
大町	18	11	17	17	16	19	18	11	17	16	13	15	188
池田	16	12	16	16	17	19	17	14	17	16	16	16	192
豊科	14	10	14	14	14	16	14	11	15	16	15	13	166
松本	15	13	17	18	19	22	20	13	19	17	15	15	203
飯田	13	12	16	19	19	22	21	15	19	18	19	14	207
長野	18	16	18	19	19	21	19	14	19	18	17	16	214

表6　月別最深積雪の記録

観測所		1	2	3	4	5	10	11	12	全年
中土	平均	331.3	439.7	341.4	214.5	52.7	0.9	25.5	195.9	
	極	530.3	742.4	530.3	390.0	220.0	6.1	49.1	303.0	742.4
	年日	昭 2.31	昭 2.13	昭 1. 1	昭19. 4	昭19. 1	昭 5.30	昭17.29	大15.24	昭 2. 2.13
南小谷	平均	129.2	155.6	136.9	44.0			12.4	82.7	
	極	305.0	315.0	270.0	190.0		1.5	80.0	197.0	315.0
	年日	昭20. 25 26	昭20. 20 24	昭20. 1	昭19. 1		昭22.24	昭 9.27	昭21.29	昭20. 2. 20 24
北城	平均	122.2	128.2	106.1	42.9		0.5	7.7	63.1	
	極	385.0	308.0	262.0	216.0		10.0	102.0	232.0	385.0
	年日	昭 9. 12 23	昭 9.23	昭 9. 5	昭 9. 1		昭22.24	昭14.28	昭 8.31	昭 9. 1. 12 23
神城	平均	128.6		126.6	41.8		0.2	8.2	85.4	
	極	190.7		178.0	131.0		10.0	40.8	197.0	197.0
	年日	昭20.25		昭22. 9	昭19. 4		昭23.16	大 6. 6	昭21.19	昭21.12.19
大町	平均	35.1	45.3	28.4	5.4			5.2	24.6	
	極	78.8	昭 87.0	70.0	56.1		1.0	45.4	102.0	102.0
	年日	大 9. 9 15	昭20.26	昭11.10 明39. 7	明41. 9		昭22.24	大10.10	昭21. 13 14	昭21.12. 13 14
池田	平均	15.8	18.4	13.4	5.1			2.2	15.1	
	極	40.0	38.0	48.4	39.4			23.5	53.0	53.0
	年日	昭22.18	昭20.26	昭41. 8	明41. 9			昭25.29	大 1.30	大 1.12.30

表7　　大町以上における大糸線沿線の積雪

駅名	年	1950	1951	1952	1953	1954	1955	平　均
大	積雪日数 (日)	80	103	56	43	61	91	72
	根雪期間 (日)	66	88	15	20	49	60	50
町	最深積雪 (cm)	80	40	20	50	50	110	60
簗	積雪日数 (日)	129	141	108	96	103	132	118
	根雪期間 (日)	126	141	106	91	100	125	115
場	最深積雪 (cm)	270	270	205	180	160	370	242
白	積雪日数 (日)	122	—	99	93	100	121	107
	根雪期間 (日)	116		96	89	98	110	102
馬	最深積雪 (cm)	165	210	150	120	160	300	184
南	積雪日数 (日)	110	125	110	94	93	100	106
小	根雪期間 (日)	99	96	99	41	90	82	84
谷	最深積雪 (cm)	220	290	280	180	230	280	247
中	積雪日数 (日)	117	125	111	96	95	99	107
	根雪期間 (日)	101	97	100	41	94	82	86
土	最深積雪 (cm)	220	330	250	180	230	300	251

II　地形および地質概説

白馬盆地は、南の神城平と北の北城平とに分けられる。

1．神　城　平

姫川の源流部にあたり南北3㎞、東西1.5㎞の山間盆地である。おそらく松川平川の堆積物によって、せき止めのためにできたのであろう鹿塩湖とよばれる旧湖沼によってできた盆地と考えることができる。

オヨミ・ガクモガ原には厚い泥炭の堆積が認められ、また盆地周辺の堆積物中にも厚い腐食土層が含まれていることからも、かょてこの湖がかなり大きな分布をしめていたと考えられる。

盆地西部は岸錐あるいは小規模の扇状地と考えられ、末端部には多量の湧水が認められる。また東部は構造改善事業のため、すっかり旧地形が確認しにくいが、未発達の河成（湖成）の段丘状の地形がみとめられ、多くの遺跡はこの台地上に分布する。この地形の成因は今後の詳しい調査を行なわなければ断定はできないが、宮原遺跡（№12）の道路横の露頭では、最上部に、約20㎝の褐色土、さらに下部に15㎝の漸移帯をはさんで、25㎝の黒褐色泥炭層をはさみ、下部は褐鉄鉱をふくむ砂質シルト層からできていて、この地層をみるかぎりでは湖沼堆積物と考えてもよさそうである。

またこの地域は東からはりだした三紀層（凝灰岩・石英安山岩）を平地の堆積物がおおっており、古墳群はこの岬状にはりだした三紀層上に作られている。

2．北　城　平

白馬盆地北部の南北7㎞、東西3㎞、第三紀層を浸食した段丘面と、松川平川による多量の堆積物による扇状地と、さらにこれを削る段丘面とからできている。

第三紀層の削られてできた段丘面として、蕨平・城山等が考えられ、山間地の野平・青鬼は、三紀層の削り残された平坦面と思われる。

松川平川による西山からの大量の堆積物は北城平のほとんどをしめる複合扇状地を作っている。しかしこの扇状地もその生成後の浸食基準面の変化によって解析を受けていると考えられ、船山・堂平等はその削り残しと考えられよう。

白馬高校　　畑　田　　充

遺跡地名表

白馬村遺跡一覧表（古墳を除く）

遺跡番号	遺跡名	旧石器	縄文					弥生		古墳時代	古墳以降
			早期	前期	中期	後期	晩期	中期	後期		
1	大原		○	○							
2	稲場			○							
3	宮屋敷			時期不詳							
4	鎌田			時期不詳							
5	小田原				○						
6	子安神社						○				
7	白山城址									○	
11	向山							○		○	
12	宮原				○					○	
13	大屋敷										○
16	北谷地 小丸山	○	○	○				○	○		
17	城峯神社			○					○	○	
19	中麻									○	
20	堀の内 小丸山							○	○		
21	程沢										○
22	下原北								○		
23	上段 第1地点			時期不詳							
24	上段 第2地点			○						○	
25	北の入			○							
26	宮の前			時期不詳							
27	滝の宮			○	○	○	○				
28	馬場平			○							
29	下麻			時期不詳							
30	堂の坂			時期不詳							
31	大麻									○	
32	向原			時期不詳							
33	善鬼堂				○						
34	馬場				○	○					
35	下くれ								○		
36	豆田				○	○					
37	屋敷										○
38	船山			○	○	○					
39	古屋敷		○	○	○	○					
40	堂平			○	○	○					
41	塩島			時期不詳							
42	岩下口			時期不詳							
43	落倉北原			時期不詳							

遺跡NO	遺跡名	所在地	種別規模現状	位置．地形．地質
1 (7568)	おっぱら 大原	神城 (内山)	包蔵地 1,500m² 原野 若干の盗掘址あるも大部分原状をとどめる	姫川の支流宮沢の原流、バンドの沢にのぞむ西向の緩斜面。 内山部落南方の山間地。
2 〔2053〕 迎場と記す	いなば 稲場	神城 (内山) 4,529番地	包蔵地 600m² 畑 宅地	姫川の支流宮沢の右岸、西向きの緩斜面。 内山部落の中
3	おみややしき 宮屋敷	神城 (内山)	包蔵地 200m² 原野 旧内山神社境内	内山部落北端前方に湿田をのぞむ南むき山麓の緩斜面。 付近に湧水あり。
4	かまだ 鎌田	神城 (内山)	包蔵地 200m² 原野	内山小盆地の北端、南北に伸びる小丘陵の南麓で、南むきの緩斜面付近に湧水あり。
5 (9066)	こだら 小田原	神城 (佐野)	包蔵地 4,000m² 原野(もと畑) 一部宅地	四ケ庄盆地の最南端。姫川の原流地親海(およみ)にのぞむ小台地で坂野坂に連なる舌状丘陵の北端にあたる平坦面である。 東側を小田原沢が開析する。平坦面全域が包蔵地と考えられ、ローム質土層腐植土層が確認できる。
6	こやすじんじゃ 子安神社	神城 (佐野) 2,588番地	包蔵地 1,200m² 神社境内	東佐野部落の南方。宮沢にのぞむ北向きの丘陵の先端上。

時期・遺物・遺構					遺物所有者	備考
旧	縄文	弥生	古墳	古墳時代以降		
	早期 前期 諸磯B.C式 打製石斧 滑石製品 （円板、その他） 石鏃（多数）		土師器 （時期不詳）		長沢　悠紀 松倉　豊	
	前期 諸磯B.C式				長沢　悠紀	
	時期不詳					
	時期不詳					
	中期 前半型式他 打製石斧				白馬村教育委員会 松倉　豊	
	晩期 氷式				松倉　豊	社殿を建てるために若干削平

遺跡NO	遺跡名	所在地	種別規模現状	位置．地形．地質
7	はくさんじょうし 白山城址	神城 （東佐野） （代表） 2,487番地	集落 6,000㎡ 水田	東佐野部落の南に面する。部落東側の丘陵に連なる巾広い台地の平坦面全域が包蔵地と考えられる。シルト質の河川堆積土層を基盤としている。
8 (5320 〜 5330) 〔1882〕 〜 〔1892〕	ひがしさの 東佐野古墳群	神城 （東佐野） 2,362番地 5,136 〃 5,137 〃 5,135 〃 5,134 〃 5,133 〃	東西200m 南北100m	東佐野部落の東西に長い小丘陵上に11基の円墳が存するが3小群に分かれる。 その1群丘陵尾根頂部に東西1列に並ぶ（5．7〜11号）。他の1群は丘陵西側末端の緩傾斜面に不規則に点在し（2〜4，6号）該して大形で形も整っている。残りの1群は他から孤立して部落入口の南向緩斜面末端に存る（1号)
9 (5335 〜 5337) 〔1879〕 〜 〔1881〕	つちはし 土橋古墳群	神城 （沢渡）		
10	むけやま 向山古墳群	神城 （沢渡） 13,080番地 12,805 〃 12,806 〃 12,807 〃		三日市場部落南方、東佐野部落まで連なる南北の丘陵の北端に位置する三基の古墳群で、眺望は良好である。

時期・遺物・遺構					遺物所有者	備考
旧	縄文	弥生	古墳	古墳時代以降		
		磨製石斧	土師器 五領式 もと住居址二軒以上の存在が認められたという。		松沢宗雄 松倉豊	昭和52年度開田のため壊滅した。
	4号墳近辺より土器片（前期？）及び打製石斧の出土を認む				白馬村教育委員会	古墳の項参照
						古墳の項参照
						古墳の項参照

遺跡NO	遺跡名	所在地	種別規模現状	位置・地形・地質
11 〔2056〕	むけやま 向山	神城 （沢渡） 13,080番地 12,805〃 12,806〃 12,807〃	包蔵地 5,000㎡ 原野 もと畑	三日市場部落の南方。宮沢をへだて宮原遺跡と向いあう。 姫川河岸段丘右岸を宮沢が開析、宮沢の河川堆積層上に立地する。 背後に向山古墳群の存する丘陵が迫る。
12 (9065)	みやばら 宮原	神城 （三日市場） 11,310番地	包蔵地 2,500㎡ 水田及び畑	三日市場部落西南方。姫川河岸段丘先端で、宮沢に臨む南西向きの緩斜面、シルト質土を基盤とする。
13	おやしき 大屋敷	神城 （三日市場） 11,323番地	包蔵地 2,500㎡ 宅地 畑	三日市場部落西南のはずれに存す。（宮沢にのぞむ河岸段丘上の平坦地） 姫川右岸河岸段丘上の広大な平坦面で、背後は宮沢に開析される。
14	しゃごじ塚	神城 （三日市場） 11,508－ロ番地		
15	きもん 鬼門塚	神城 （三日市場） 11,574番地		
16 (9068) 〔2055〕	きたやち 北谷地 こまるやま 小丸山	神城 （北谷地） 17,263番地	集落 原野 宅地 東部の$\frac{1}{3}$ほどは採土のため削平されている	掘の内部落と北谷地部落の間にある比高約15mの小丘陵先端の平坦面全域が包蔵地となる。 又、丘陵平坦面西端及び中央に小円墳が三基認められている。 地山は不詳だが細砂質で、その上にローム及腐植土が薄く堆積する。

時期・遺物・遺構					遺物所有者	備考
旧	縄文	弥生	古墳	古墳時代以降		
	磨製石斧	土師器 杯甕 （時期不詳）			篠崎　喜賀 白馬村教育委員会	
	前期後半 あるいは中期前半		土師器 須恵器 （もと開田の折に杯が出土したという）		松倉　豊 白馬村教育委員会	
				土師質土器 時期不詳	白馬村教育委員会	中世沢渡氏の居館址
						古墳の項参照
						古墳の項参照
ナイフ形石器 石刃 尖頭器 石核	早期 山形及楕円押型文 前期 関山式或は黒浜式 諸磯A或はB式 打製石斧、石錐、磨製石斧、石匙、凹石	中期 栗林式 後期 箱清水式 同期の住居址1軒 磨製石斧、滑石製紡、錘車、同装身具、磨石	土師器 （時期不詳）		白馬村教育委員会 鎌倉　伸夫 松倉　豊	古墳の項参照

遺跡NO	遺跡名	所在地	種別規模現状	位置．地形．地質
17 (7572)	じょうみねじんじゃ 城峯神社	神城 (堀之内) 15,152イ～ ロ番地	包蔵地 2,500㎡ 神社境内	(堀之内部落の北部。尾根の先端上の平坦地) 堀之内部落北側背後の小山塊、南向の尾根先端に存する平坦地で背後に城址と古墳群がひかえる。 急斜面を経て堀之内部落に至る。
18 (5351 ～ 5333) 〔1875〕 ～ 〔1877〕	じょうみね 城峯古墳群	神城 (堀之内) 15,131番地 15,122〃		堀之内部落背後の丘陵上、城峯神社及城址の上方に位置する。広い南向丘陵斜面に不規則な配置で五基の円墳が存する。冲積地からの比高が高く眺望は良好である。
19	なかあそ 中麻	神城 (堀之内) 18,028～ ニ番地	包蔵地 1,500㎡ 桑園 宅地	堀之内部落内の西側はずれに存する。谷地川にのぞむ低い段丘上最末端で南向きの緩斜面。厚い河川堆積層を基盤とする。
20	ほりうち 堀之内 こまるやま 小丸山	神城 (堀之内) 15,062地	包蔵地 900㎡ 桑園 墓地	堀之内部落北端南むきの段丘上で、部落背後の小山塊の裾にも相当する。南向き緩傾斜面で散布範囲は狭い。段丘下に湧水が存す。
21	ほどさわ 程沢	神城 (飯田) 19,017 ～2	不詳	姫川右岸段丘の上だが不詳

時期．遺物．遺構					遺物所有者	備考
旧	縄文	弥生	古墳	古墳時代以降		
	前期 諸磯A式	後期	土師器		松倉　豊 柏原　孝吉	山利用される 中世城に
						古墳の項参照
			土師器 高杯ほか 鬼高式 （6世紀）		白馬村教育委員会 柏原　孝吉	倉庫建築のため一部破壊
		中期 栗林式 後期 箱清水式 打製石庖丁			白馬村教育委員会 柏原　孝吉	
				施釉陶器（1片のみ） （時期不詳）	白馬村教育委員会	整備のため動かした土の中より発見したため、正確な位置、種別等不明である。 圃場

遺跡NO	遺跡名	所在地	種別規模現状	位置．地形．地質
22	しもはらきた 下原北	神城 （飯田）	包蔵地 1,000㎡ 宅地 原野	姫川右岸の段丘上の狭い平坦面を程沢が開析する。この程沢に臨む南向きの緩斜面全域が包蔵地と考えられる。
23	わだん 上段 第1地点	神城 （飯田）	包蔵地 1,000㎡ 原野 水田 土砂採取のため大半は失なわれる。	姫川右岸の河岸段丘上の平坦面の先端に立地。河川堆積層を基盤とする。
24	わだん 上段 第2地点	神城 （飯田）	包蔵地 4,000㎡ 水田 原野	姫川右岸、河岸段丘先端。北側に小山塊をひかえる。
25	きたいり 北の入	神城 （飯田）	包蔵地 原野	姫川右岸、山麓の舌状台地中央部分。
26	みやまえ 宮の前	北城 （嶺方） 23,622 －イ号 番地	包蔵地 400㎡ 宅地 畑 神社境内	嶺方部落中央の諏訪社前。山すその東向き緩傾斜地。
27 (5338) 〔2058〕	たきみや 滝の宮	北城 （幸田） 26,087 番地	包蔵地 2,000㎡ 水田 桑畑	幸田部落の東方、日向沢の段丘上、南向緩斜面山麓湧水地帯で小さな沢の開析により複雑な微地形をなす。

時期・遺物・遺構					遺物所有者	備考
旧	縄文	弥生	古墳	古墳時代以降		
	凹石	後期 箱清水		土師質の甕形土器 （平安末～鎌倉時代）		
	尖頭器				白馬村教育委員会	
	前期後半～中期前半型式 チャート片 石皿		土師器 杯（時期不詳）		白馬村教育委員会	
	前期 諸磯A式 B式				白馬村教育委員会	
	チャート片				白馬村教育委員会	
	前期 諸磯A～C式 中期 曽利式 加曽利E式 後期 堀之内I.II式 晩期 天王山式				郷津　元治 松倉　豊	

遺跡NO	遺跡名	所在地	種別規模現状	位置・地形・地質
28	ばんばだいら 馬場平	北城 （蕨平） 22,171 （代表）	包蔵地 5,000㎡ 畑	蕨平部落、背後の丘陵は部落東側で巾広い平坦面を形成する。この若干南又は西に傾斜する平坦面全域に遺物が散見される。
29 (5342) 〔2063〕	しもあそう 下麻	北城 （蕨平） 21,682 番地	包蔵地 2,500㎡ 宅地	蕨平部落の西南方、姫川右岸の段丘先端に位置する背後に丘陵が迫り、西向き緩傾斜面は狭長である。 眼下に姫川本流を見下す。
30 〔2063〕	どうさか 堂の坂	北城 （蕨平） 21,736-1 番地	包蔵地 2,000㎡ 畑 宅地	蕨平部落の存する丘陵西斜面に張り出したテラスの先端付近、西向き傾斜面に存る。
31	おおあそう 大麻	北城 （野平） 代表 18,420 番地	包蔵地 2,500㎡ 畑 宅地	沢尻沢の源流の西むきの緩傾斜地。 野平部落の西に続く地域ローム層が確認できる。
32	むけばら 向原	北城 （野平） 代表 18,142 番地	包蔵地 1,000㎡ 畑	沢尻沢源流の南尾根傾斜地の末端。 野平部落の西南に位置する南尾根の西南向緩傾斜地畑地の下部ローム層が確認できる。
33	ぜんきどう 善鬼堂	北城 （青鬼） 代表 17,451 番地	包蔵地 2,500㎡ 原野 桑園	青鬼部落の北方上物。神社の下手。 青鬼沢にのぞみ南に面する台地の上部段丘の上に立地する。

時期・遺物・遺構					遺物所有者	備考
旧	縄文	弥生	古墳	古墳時代以降		
	前期 諸磯A.B式土器 チャート製フレイク チャートチップ 緑泥片岩チップ 玦状耳飾			土師質土器 須恵質施釉陶器	白馬村教育委員会	
	時期不詳 滑石製品(大量)					ホテル建設のため数年前に壊滅したとみられる。
					白馬村教育委員会	詳細未確認
			須恵器(時期不詳) 土師器・甕(時期不詳)		白馬村教育委員会	
	チャート剝片(時期不詳)				白馬村教育委員会	
	中期 後期堀之内式				白馬村教育委員会	

遺跡NO	遺跡名	所在地	種別規模現状	位置・地形・地質
34 (7567) 〔2060〕	ばんば 馬場	北城 (青鬼) 代表 17,592 番地	包蔵地 5,000㎡ 畑	青鬼部落の東端青鬼沢にのぞむ南面の台地。
35	しも 下くれ	神城 (沢渡) 6,899 番地	包蔵地 4,000㎡ 桑園 宅地	沢渡部落内。 姫川左岸滝沢の広い扇状地の中央部で、姫川との合流点に近い東向き緩傾斜地。扇状地堆積層を基盤とし、姫川の後背湿地帯にのぞむ。
36 (7566) 〔2057〕	まめだ 豆田	神城 (飯森) 代表 24,664 番地	包蔵地 2,500㎡ 水田 宅地	飯森部落東北端。平川の形成した扇状地最末端の平坦地。姫川の後背湿地に臨む。
37	やしき 屋敷	神城 (飯森) 26,932 番地	包蔵地 1,500㎡ 水田	飯森部落北西方の山麓の小テラスで平川扇状地の扇頂に近く、扇状地の上にのるかもしれない。
38 (5341) 〔2061〕	ふなやま 船山	北城 (蕨平) 代表 1,886 番地	包蔵地 4,000㎡ 原野 墓地 盗掘あと著し	白馬町南東。 扇状地末端姫川を眼下に見おろす孤立小丘陵。第3紀層もしくは扇状地堆積層が開析された残丘らしい。 小丘陵全面が包蔵地となる。
39 (7565)	ふるやしき 古屋敷	北城 (八方) 5,045 番地	集落 6,000㎡ 畑	八方部落の中大樽川扇状地の一角、段丘下。

時期遺物・遺構					遺物所有者	備考
旧	縄文	弥生	古墳	古墳時代以降		
	中期前半型式 〃 後半型式 後期堀之内式 打製石斧 磨製石斧				白馬村教育委員会 郷津 勝忠	
		後期 箱清水式			宮沢 千治 松倉 豊	
	中期前半型式 曽利1.2式 後期堀之内式				田中 要 武田 稔 松倉 豊 西沢 良典	
				灰釉段皿	窪田伊左衛門	
	前期 黒浜式 諸磯A.B式 北白川下層 中期 曽利式 後期 堀之内I.II式				田中 要 西沢 良典 郷津 元治 白馬中学校	信濃考古学会誌
	早期 楕円押型文土器 前期諸磯B式 中期曽利式 後期堀之内式			土師質甕	白馬中学校 松倉 豊 大谷徳衛門	信濃複原住居

遺跡NO	遺跡名	所在地	種別規模現状	位置・地形・地質
40 (5339) 〔2059〕	どうだいら 堂平	北城 (大出) 8,252 番地	包蔵地 200m² もとは更に広かったものを松川によって削られたようである。	大出部落東北方松川と姫川の合流点に近い残丘様の丘陵。
41	しおじま 塩島	北城 (塩島) 13,000 番地	包蔵地 4,000m²	姫川、松川合流点に残丘様に残る城山の西裾
42	いわしたぐち 岩下口	北城 (塩島)	包蔵地 400m² 水田	姫川右岸、塩島部落西方。牧寄丘陵南東向斜面の裾にあたり、松川の扇状地の末端にのるらしい。若干南東向の緩傾斜地。
43	おちくらきたばら 落倉北原	北城 (落倉) 14,920 ～67番地	包蔵地 畑 宅地 原野	姫川左岸、親の原に連なる広大な落倉原の中央部東はずれ、いく分か東向きの傾斜をもつが、ほぼ平坦な原野で、西側を小さな沢が深く開析し、ローム層が確認できる。遺物散布は散漫である。

時期・遺物・遺構					遺物所有者	備考
旧	縄文	弥生	古墳	古墳時代以降		
	前期　諸磯B式 中期 　新道式 　藤内式 　曽利Ⅰ.Ⅱ式 　加曽利E式 後期 　堀之内式 打製石斧 石鏃 石皿				横山　泉 藤森　健正 松倉　豊	
	時期不詳 磨製石斧 打製石斧				塩島　義人	
	打製石斧 時期不詳				塩島　義人	
	磨製石器 （時期不詳）				笠井　正則	

遺跡NO	名　　称	所　在　地	規　模　・　形　状	現　　状
8の1 (5320) 〔1885〕	ひがしさの 東　佐　野 1　号　墳 （通称鎧塚）	神　　城 （東佐野） 2,362 番地	円墳 南北　13.80m 東西　15.00m 高　　2.60m	道路工事のため周囲を若干削り取られる。 墳丘上に道祖神祠。
8の2 (5321) 〔1883〕	東　佐　野 2　号　墳	神　　城 （東佐野） 5,136 番地イ号	円墳 東西　14.50m 南北　8.20m 高　　2.30m	家屋建築のため墳丘の南半分を失う。 墳上に祠あり。
8の3	東　佐　野 3　号　墳	神　　城 （東佐野） 5,136 番地イ号	円墳 東西　11.90m 南北　10.60m 高　　1.10m	山林
8の4	東　佐　野 4　号　墳	神　　城 （東佐野） 5,137 番地ロ号	円墳 径南北28.60m 上部平坦面の径 6.60m 墳端の径 19.60m 高南端で 2.15m 北端で 2.25m 周濠（巾4.1m、深0.75m）が全周する。上部の平坦面が明瞭に残る石室は存せず、木棺直葬墳の可能性が強い。東佐野古墳群中最大である。	山林内

位置・地形・地質	時期・遺物	備考
東佐野部落の入口 ゆるやかな広い尾根の先端の南向きの緩傾斜地にあり、やや孤立している。基盤の地質は不明だが、シルト質土と腐植土を不規則に盛り上げて墳丘を形成している。		
東佐野部落の背後、ゆるやかな尾根上。	刀子（時期不詳、現在なし）	
東佐野部落の背後。2号墳の北東に並ぶ。 ゆるやかな尾根を浅くカットし、盛土をして築造している。		昭和27年項トレンチを入れて調査したことがあるが、無石郭墳であり、遺物の出土もなかった。
東佐野部落背後。ゆるやかな尾根の北むきの斜面。 3号墳の北にやゝ離れて並ぶ地質は河川堆積層かと思われる礫含みの層の上に浅く（数cm程）ローム層が被り、さらに腐植土が厚く堆積する。古墳は腐植を基盤とし、ローム質土、腐植土円礫含みのシルト質土を乱雑に、不規則に積み上げる。濠は腐植土からローム河川堆積層上面へ掘り込んでいる。	土師器杯 （6世紀後半）	昭和53年11月トレンチを入れて確認調査を実施する。 封土中に縄文土器片を含む。

遺跡NO	名称	所在地	規模・形状	現状
8の5	東佐野 5号墳	神城 (東佐野) 5,136 番地イ号	円墳 南北 10.90m 東西 13.60m 高北 0.60m 南 1.30m 墳頂平坦面が良好に残る。	山林内
8の6	東佐野 6号墳	神城 (東佐野) 5,135 番地	円墳 径南北 10.90m 高北 0.90m 南 0.45m 直径に比べ高さが低く、古墳群中では特異な形状を呈す。	山林内
8の7	東佐野 7号墳	神城 (東佐野) 5,135 番地	円墳 径南北、東西とも 10.30m 高東 1.20m 西 1.30m	山林内
8の8	東佐野 8号墳	神城 (東佐野) 5,135 番地	円墳 径東西 11.50m 高東 1.00m 西 0.90m	山林内 ゴミ捨て場となり原状を損う。
8の9	東佐野 9号墳	神城 (東佐野) 5,134 番地イ号	円墳 径東西 9.10m 高さ現状で 0.70m	中心部を破壊されている。 山林
8の10	東佐野 10号墳	神城 (東佐野) 5,134 番地イ号	円墳 径東西 9.10m 高さ現状で 東 1.30m 西 0.45m	墳丘上に祠を作ってあるため、上部が削平されている。

位置．地形．地質	時期．遺物	備考
東佐野部落背後の尾根上3号墳の北東寄りに並ぶ。		
東佐野部落背後の尾根の北西斜面の最末端4号墳の西に30mほど離れて並ぶ。		
東佐野部落背後の狭小な尾根上にあり、5号墳の東に並ぶ。 以下11号墳まで尾根上に1列に並ぶ。		
東佐野部落背後の尾根の平坦面で、7号墳の東約20mの地点。		昭和27年調査のためトレンチを入れる。 無石郭墳。
部落背後の尾根の上8号墳の東に並ぶ。		
部落背後の尾根上、9号墳の東に接する。		

遺跡NO	名　　称	所　在　地	規　模　・　形　状	現　　状
8の11 (5330) 〔1892〕	東　佐　野 11号　墳	神　　城 (東佐野) 5,133 番地	円墳 径東西 19.50 m 高東　2.50 m 西　2.10 m	山林内
9 (5335) 〔1879〕	つちはし 土橋古墳 (通称 屏風塚)	神　　城 (沢　渡)	円墳 現状で 径南北 10.00 m 東西 8.20 m 高南　1.60 m 北　1.50 m	原野 開田のため東部を大きく失う。
10の1	むけ　やま 向　山 1　号　墳	神　　城 (沢　渡) 13,080番地 12,805〃 12,806〃 12,807〃	円墳 径　14.90 m 高　1.30 m 墳頂に平坦面を残す。	山林内 よく現状をとどめる。
10の2	向　山 2　号　墳	神　　城 (沢　渡) 13,080番地 12,805〃 12,806〃 12,807〃	円墳 径南北 19.80 m 頂上平坦面の径 7.10 m 高南　2.20 m 北　2.50 m	山林内 よく現状をとどめる。
10の3	向　山 3号号　墳	神　　城 (沢　渡) 13,080番地 12,805〃 12,806〃 12,807〃	円墳(方墳の可能性あり) 径東西 14.30 m 高西　1.80 m 東　2.00 m 径に比べて低く、特異な形状である。	山林内 道路工事、堰工事のため多少変形がみられる。
14	しゃごじ塚	神　　城 (三日市場)	円墳 現状で 径東西 12.00 m 高　3.00 m	墳上に祠と社藪、道路、宅地等により周囲を削り取られている。

位置・地形・地質	時期・遺物	備考
部落背後の尾根上の東端、10号墳の東に接する。		
段丘の最高所先端に立地。 姫川右岸の河岸段丘先端に立地する。		信濃考古総覧によればもとの大きさ 径　20.6m 高　2.2m もと付近には他に2基の古墳があったが壊滅。
三日市場部落南、宮沢の上に東から延びる尾根の先端に立地。北西向き急傾斜面で眺望は良好である。		
1号墳の上に続く、急斜面に立地。尾根の先端を深く切断して墳丘をつくる。		
尾根の最末端で宮沢の冲積地に直面するごく緩やかな北向斜面。尾根寄りの墳端部分より須恵器等の遺物が出土しており、埋葬に伴う儀礼の痕跡が残る可能性がある。	須恵器提瓶 （6世紀末） 土師器・甕 （時期不詳）	
三日市場部落西端上部段丘下。		

遺跡NO	名　　称	所　在　地	規　模　．　形　状	現　　状
15	きもん 鬼　門　塚	神　　城 （三日市場）	円墳 径南北　9.00 m 高　　1.50 m	宅地内 形が崩れているらしい。
16の1	こまるやま 小　丸　山 1　号　墳	神　　城 （北　谷　地） 17,263 番地	円墳 径　　7.20 m 高　　0.80 m 若干の盛土のみの小円墳。	原野 原状を保つ。
16の2	小　丸　山 2　号　墳	神　　城 （北　谷　地） 17,263 番地	円墳 径東西　7.65 m 南北　8.90 m 濠の径 東西 11.90 m 高　　1.20 m 濠はほぼ半周。盛土は高いやや楕円形の円墳で、小丸山古墳群中最大である。	原野 原状を保つ。
16の3	小　丸　山 3　号　墳	神　　城 （北　谷　地） 17,263 番地	円墳 径　　4.20 m 高　　0.60 m 極めて小規模で古墳と認められるかどうか微妙である。	原野 原状を保つ。
18の1 (5331) 〔1875〕	じょうみね 城　　峯 1　号　墳	神　　城 （堀　之　内） 15,131 番地	円墳 径 南北　16.00 m 東西　17.00 m 高 南　　1.90 m 北　　1.40 m 上部平坦面の径 東西　8.00 m 南北　7.40 m	山林内 原状を保つ。

位置．地形．地質	時期．遺物	備考
三日市場部落北端山麓。		
丘陵平坦部最西端でかなりの傾斜をもつ西向き斜面に1基のみ孤立して存する。		
丘陵頂部平坦面の南端に位置する。墳丘南斜面は丘陵斜面に連続する。弥生後期及縄文前期の包蔵地上に築造されているもようである。		
丘陵頂部平坦面の南端、2号墳の東10m程に位置する。 〔尚、この3基以外の古墳（小円墳）が存在した可能性が強い。〕		
堀之内部落の北に接する丘陵上。北から延びる巾広いゆるやかな尾根の上の南向き斜面に立地。		

遺跡NO	名　　称	所　在　地	規　模　・　形　状	現　　状
18の2 (5332) 〔1876〕	城　峯 2　号　墳	神　　城 （堀之内） 15,122 番地	円墳 径南北 25.00 m 東西 26.60 m 高　南 2.80 m 北 2.00 m 上部平頂面の径 東西 10.70 m 南北 11.00 m 幅 2.5 mの周濠をめぐらす。	山林内 よく原状を保つ。
18の3	城　峯 3　号　墳	神　　城 （堀之内） 15,122 番地	円墳 径東西 8.00 m 南北 10.00 m 高　南 1.80 m 北 1.10 m 上部平坦面 東西 3.00 m 南北 3.40 m	山林内 よく原状をとどめる。
18の4	城　峯 4　号　墳	神　　城 （堀の内） 15,122 番地	円墳 径東西 5.00 m 南北 5.00 m 高　北 0.40 m 南 0.80 m	原野
18の5	城　峯 5　号　墳	神　　城 （堀之内） 15122 番地	円墳 径東西 11.70 m 南北 10.00 m 高　南 1.80 m 北 1.10 m	原野

位置・地形・地質	時期・遺物	備考
堀之内部落の北の丘陵上北から延びる尾根上に立地。		
堀之内部落の北の丘陵上。 北から延びる尾根の上に立地。		
堀之内部落の北の丘陵上。 北から延びる尾根の上に立地。		
堀之内部落北の丘陵上。 北から延びる尾根の緩傾斜面。		

遺跡と遺物

遺跡遠望

I

6　子安神社▽1　2・3・4　稲場・宮屋敷・鎌田▽2　8　東佐野古墳群▽3　11　向山▽4この北側に宮原・大屋敷・城峰・小丸山・中麻・程沢・北の入り・上段と遺跡が続く（西より撮影）

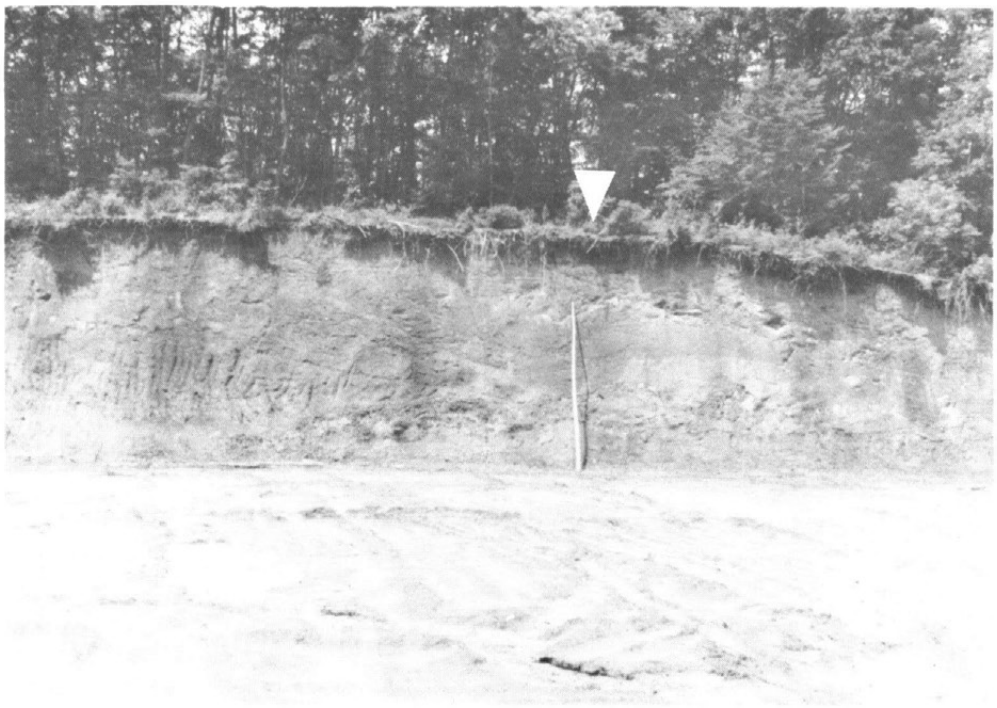
38 帆山△　28 馬場平△　29 下麻△　30 堂の坂△（西より撮影）

８の１　東佐野１号墳（通称鎧塚）
南より撮影

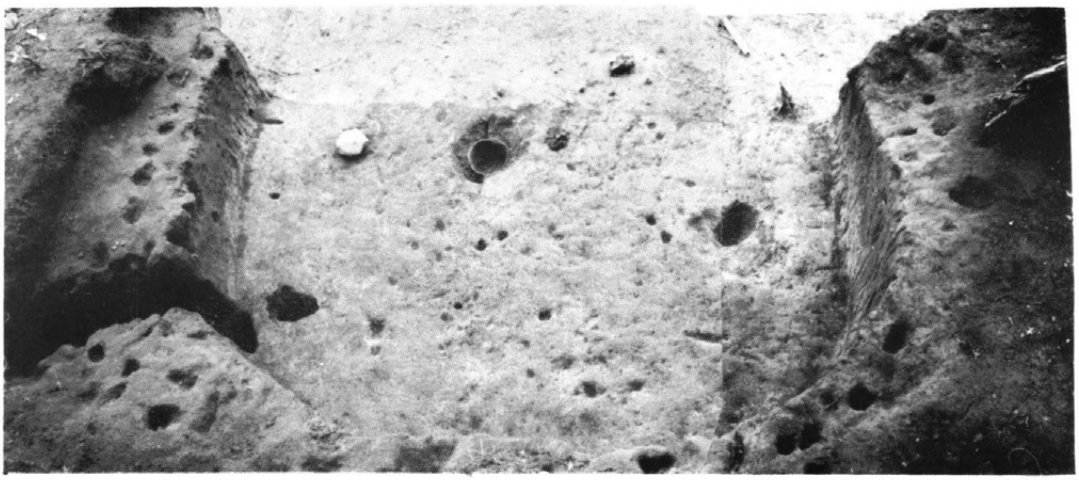
８の２　東佐野２号墳（北より撮影）

8の4　東佐野3号墳（南西より撮影）

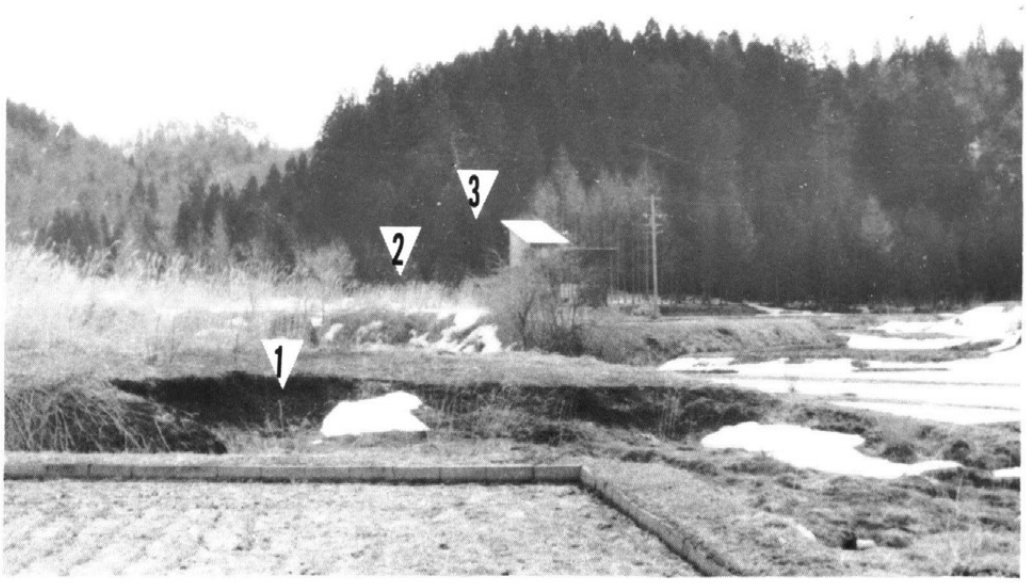
9　土橋古墳（通称屏風塚）
西より撮影



10　北谷地小丸山（東より撮影）棒の立っている上部分が住居址。

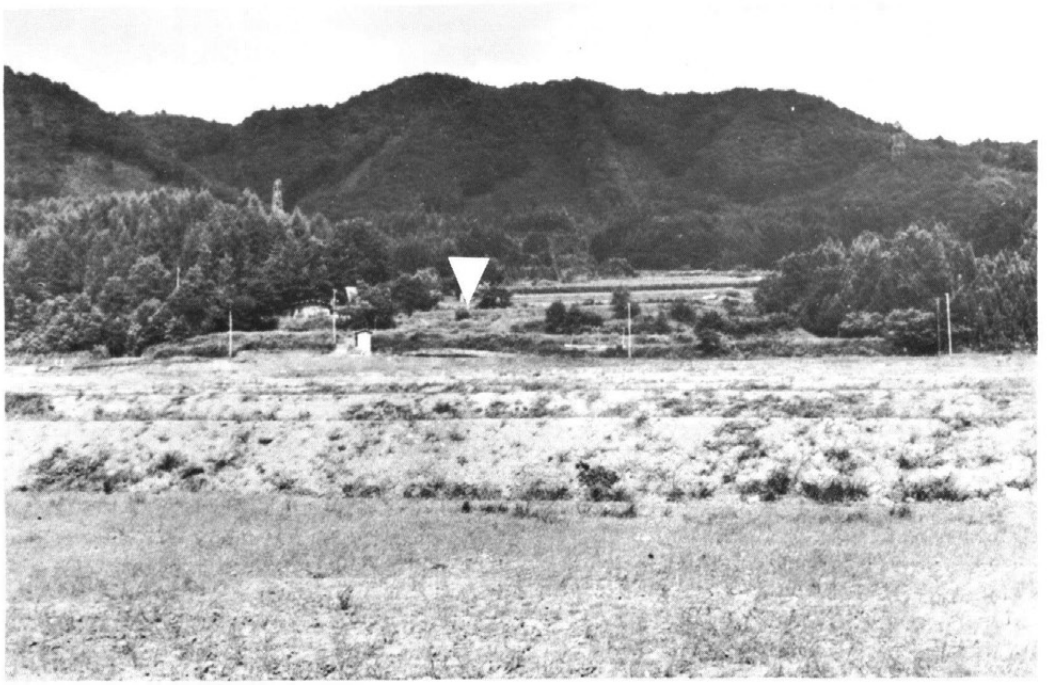


発掘された住居跡



11　向山③　12　宮原①　13　大屋敷②（西より撮影）

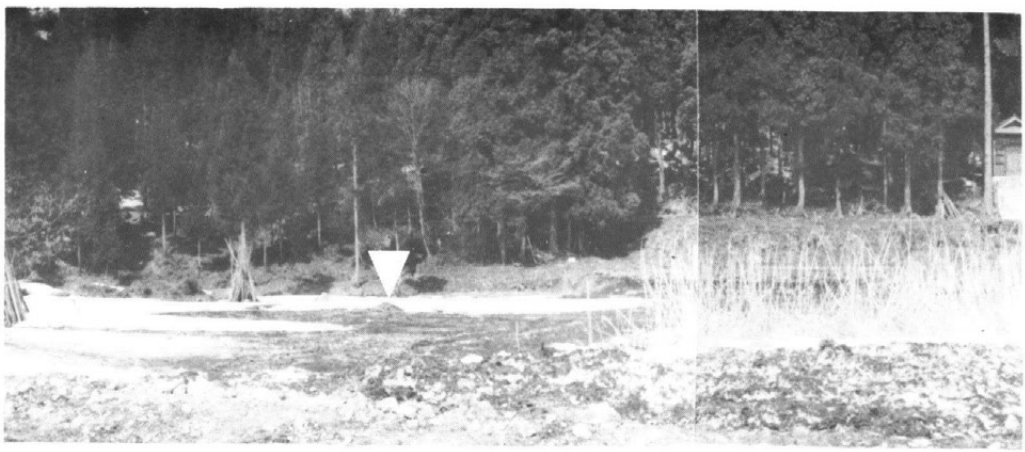
18　城峰１号墳（左側）この南側に城峰遺跡がある。（南より撮影）



21　程沢（西より撮影）

31　野平大麻（西南より撮影）

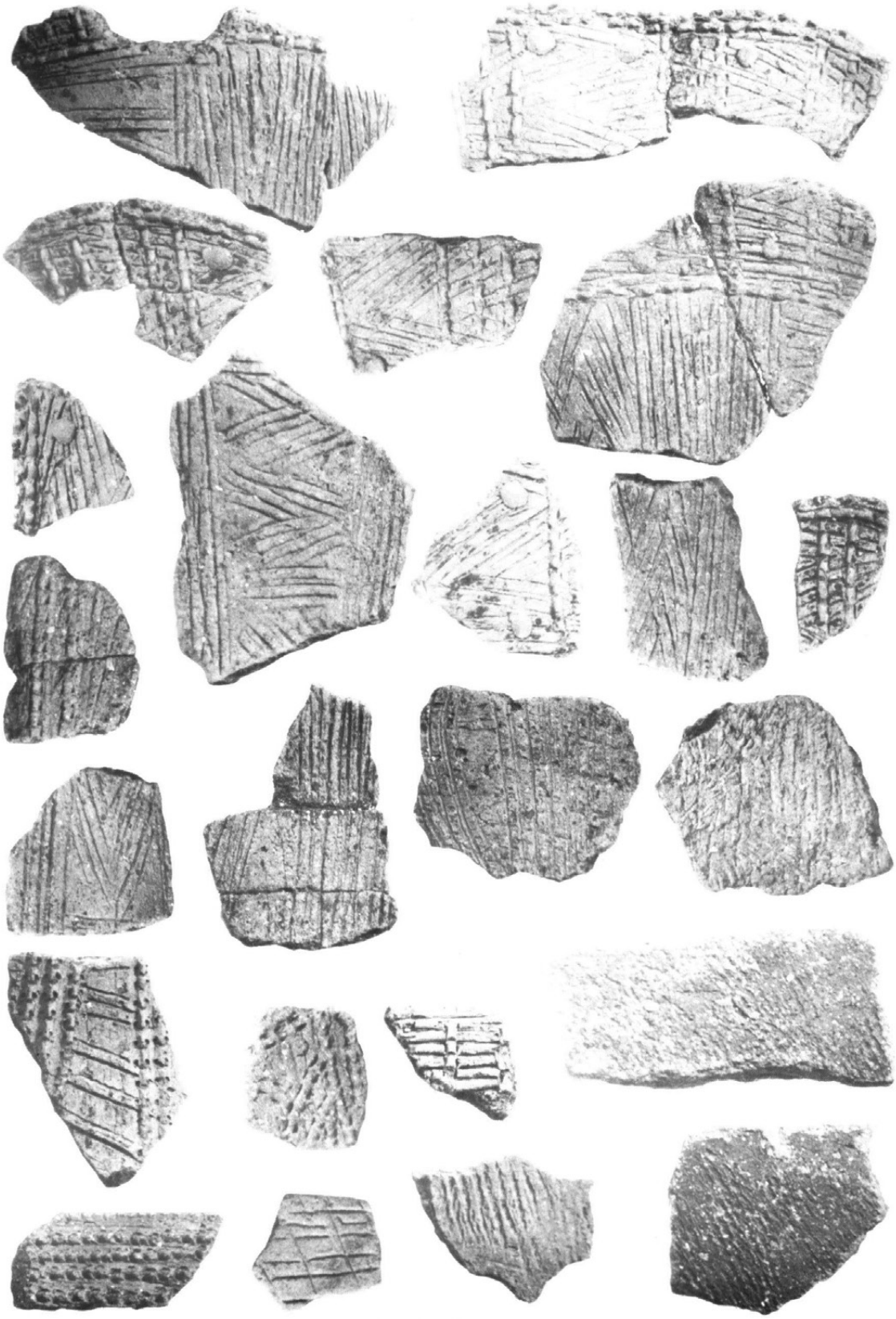
34　青鬼馬場（北西より撮影）



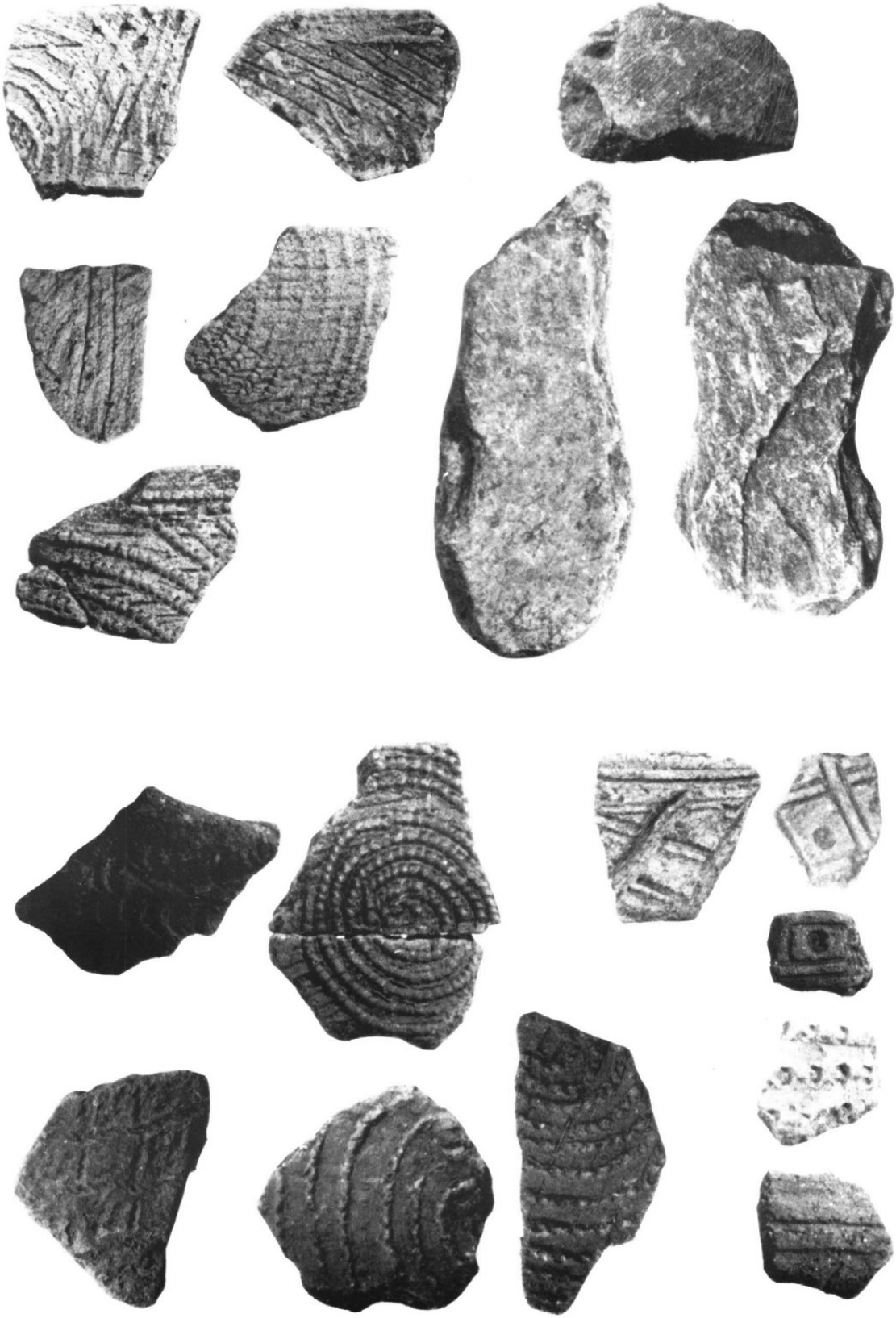
39　古屋敷（南より撮影）

40　堂平（北西部城山より撮影）

43　落倉開拓地（北東より撮影）

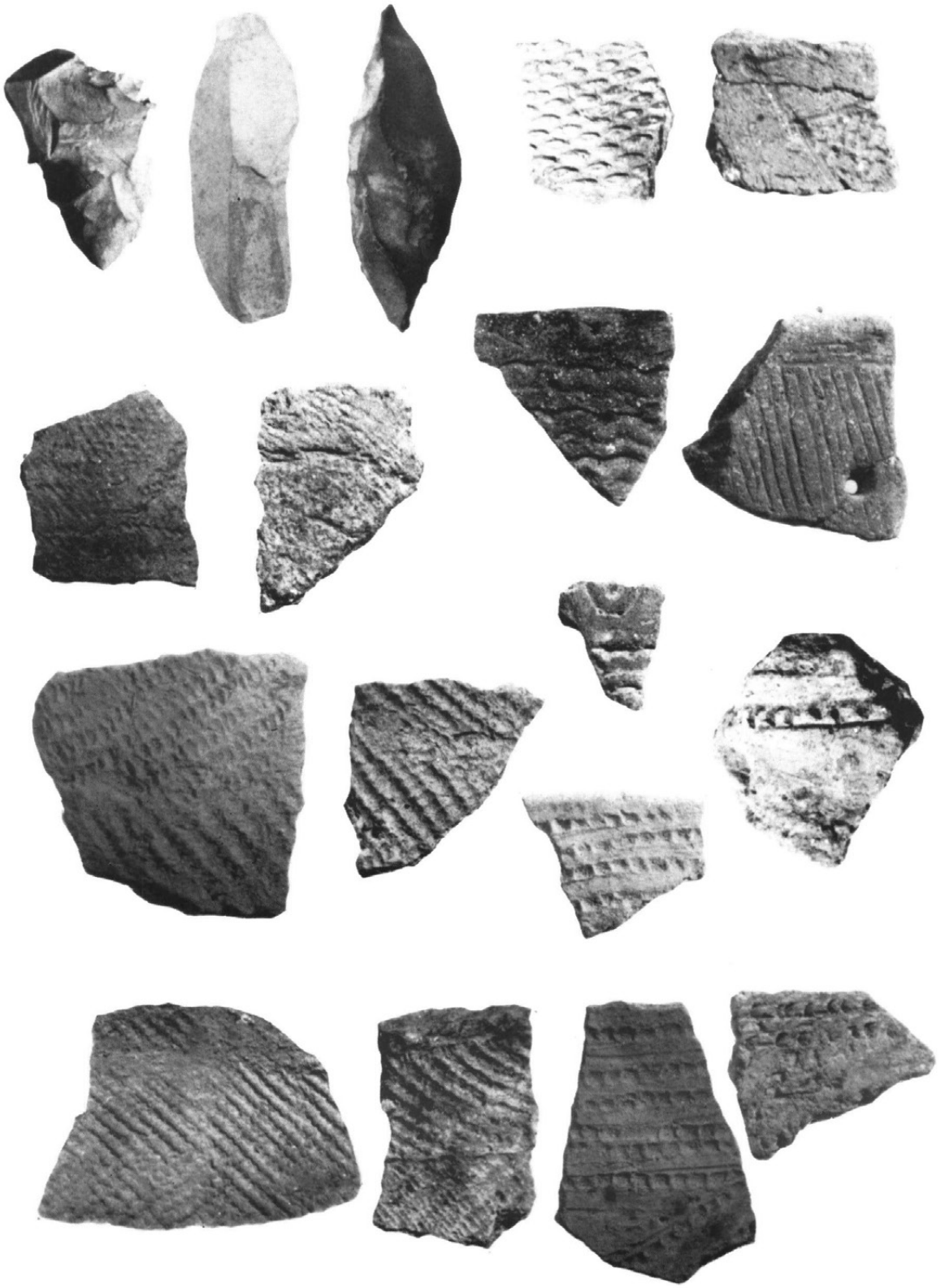


1　大　原　遺　跡



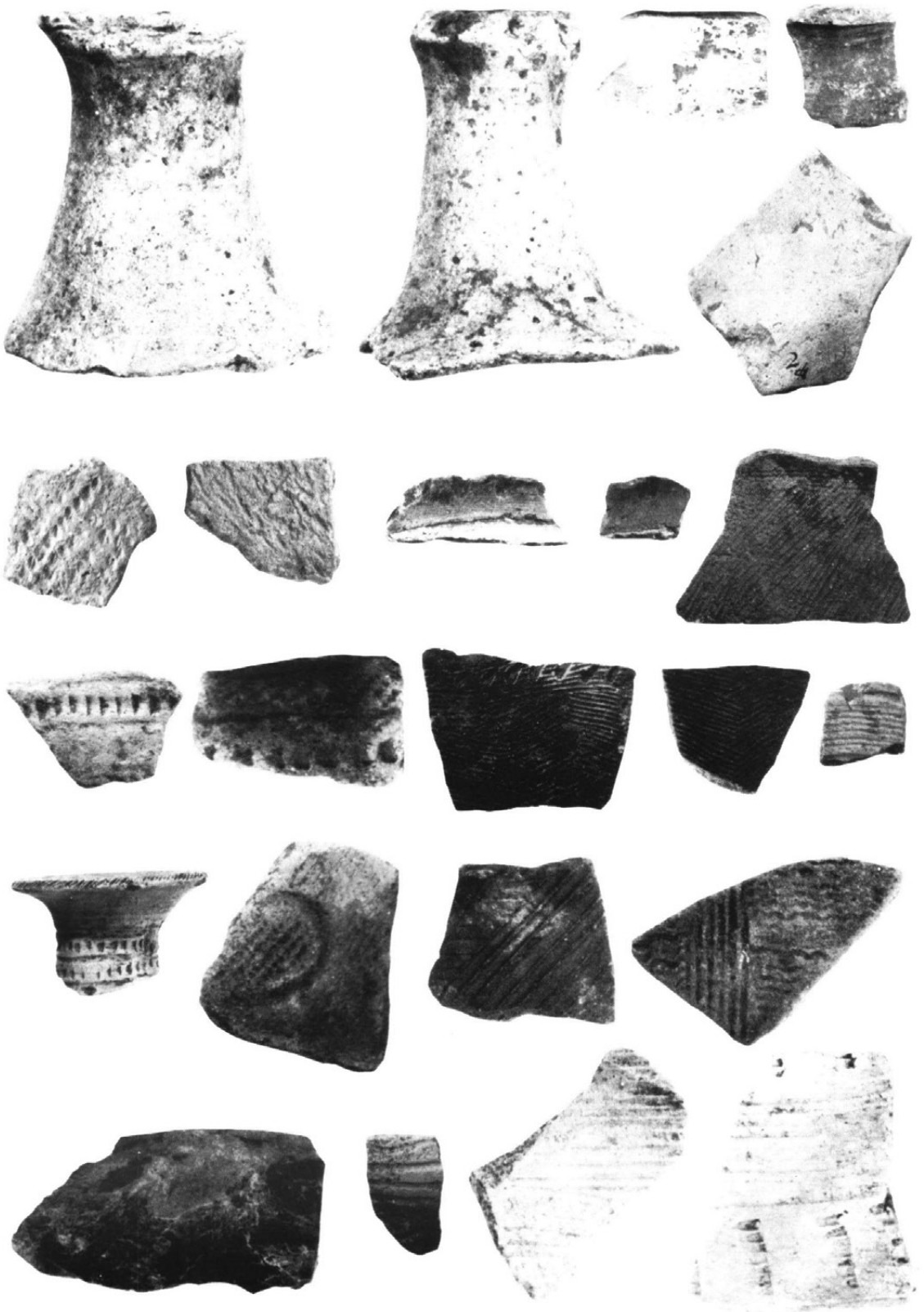
上段　1　大原遺跡
下段　2　稲場遺跡

上段左　6　子安神社遺跡　上段右　8　東佐野4号墳
上段中　7　白山城址遺跡　下段　12　宮原遺跡

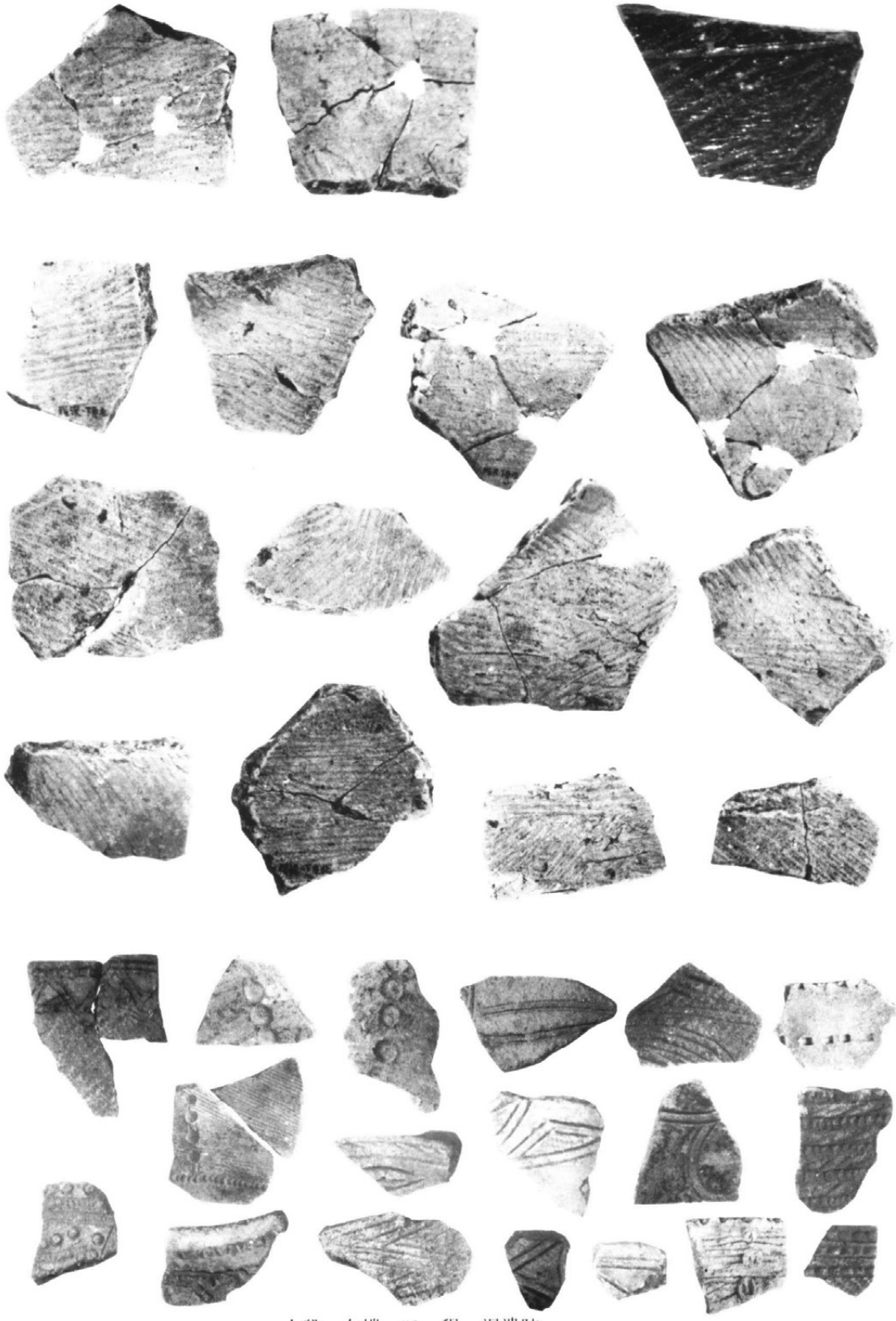


16　北谷地小丸山遺跡

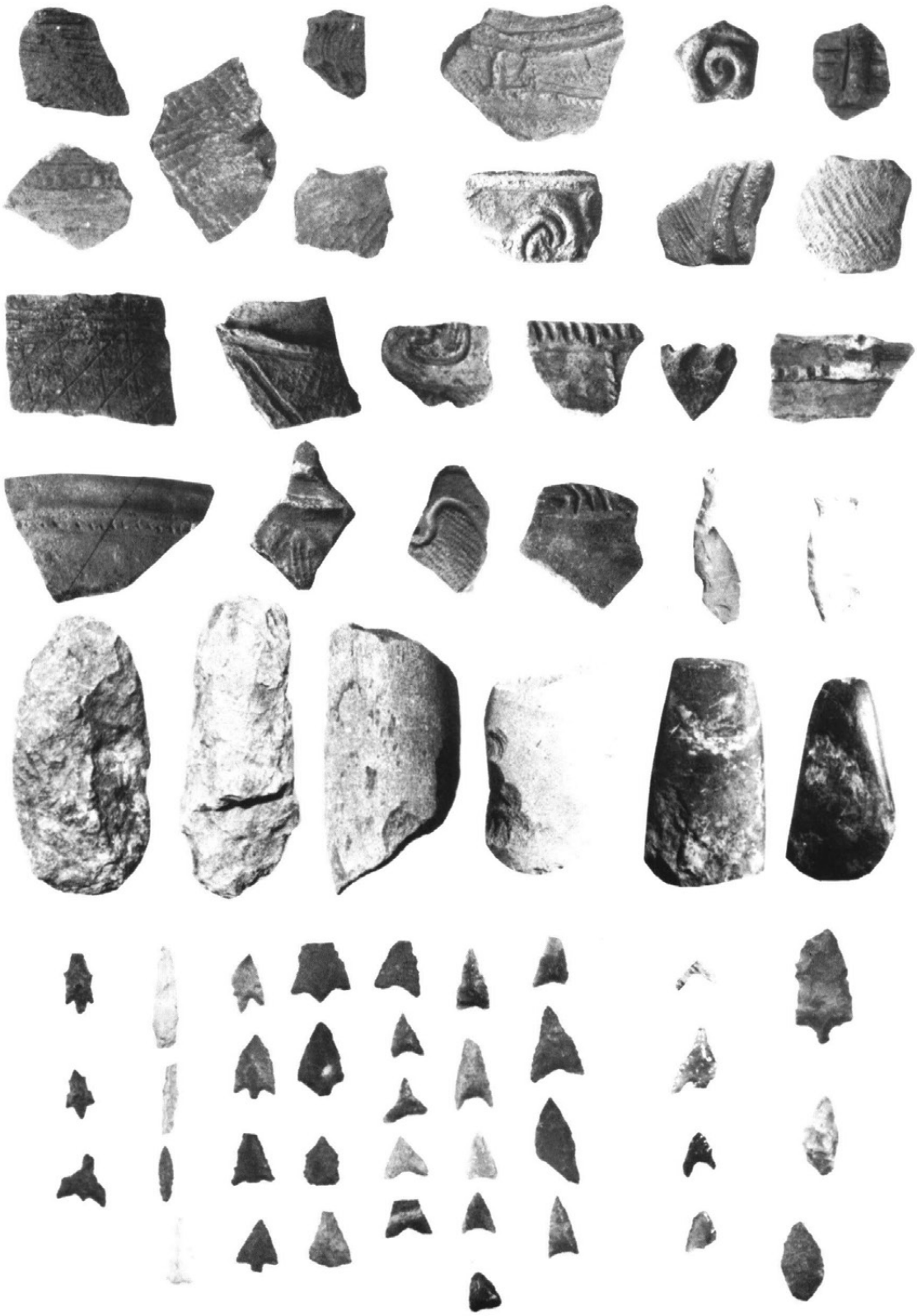
上段　16　北谷地　小丸山　遺跡
下段　17　城　　峰　　遺　　跡



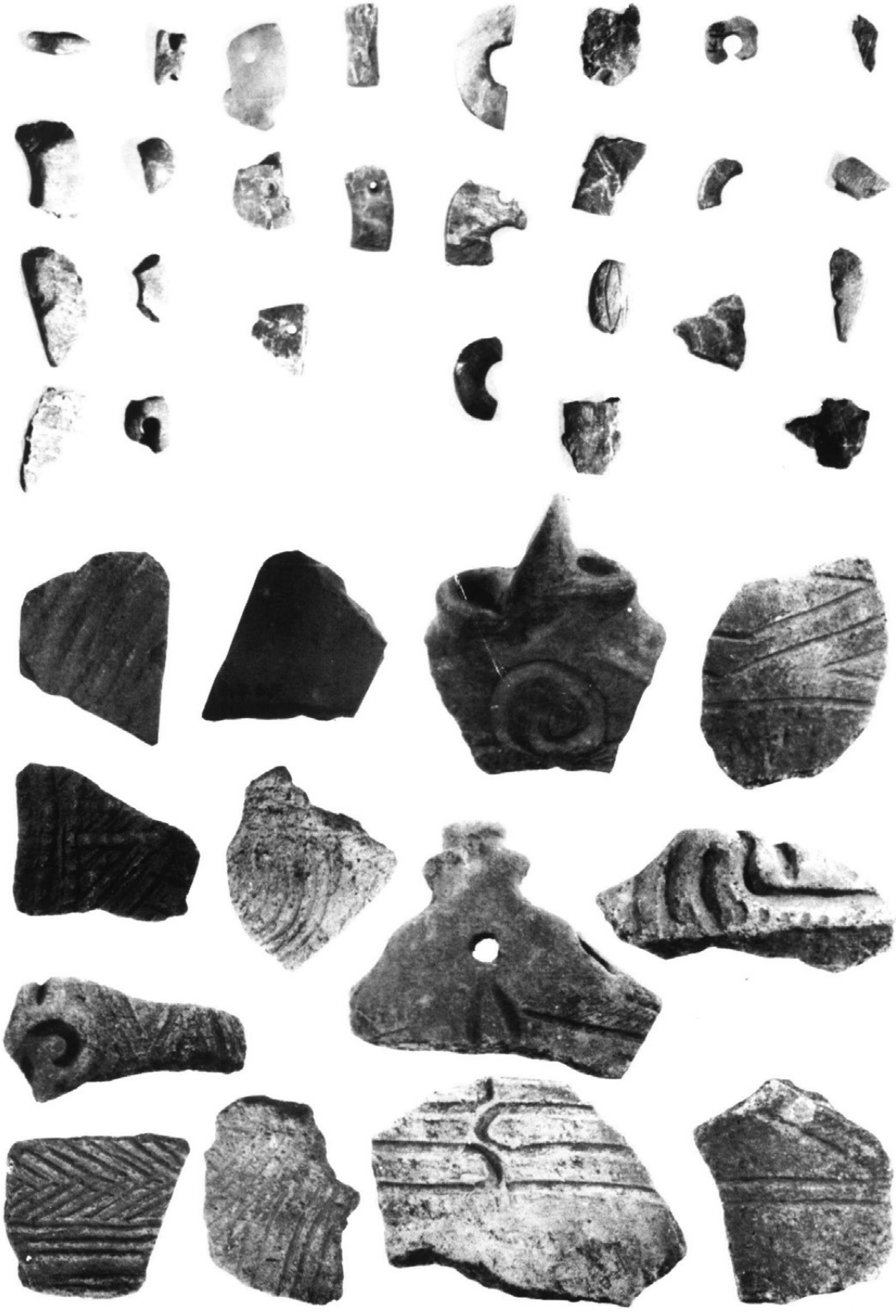
上段　19　中あそ遺跡
下段　20　堀之内　小丸山遺跡



上段　右端　21　程　沢遺跡
上段　　22　下原北遺跡
下段　　27　滝の宮遺跡

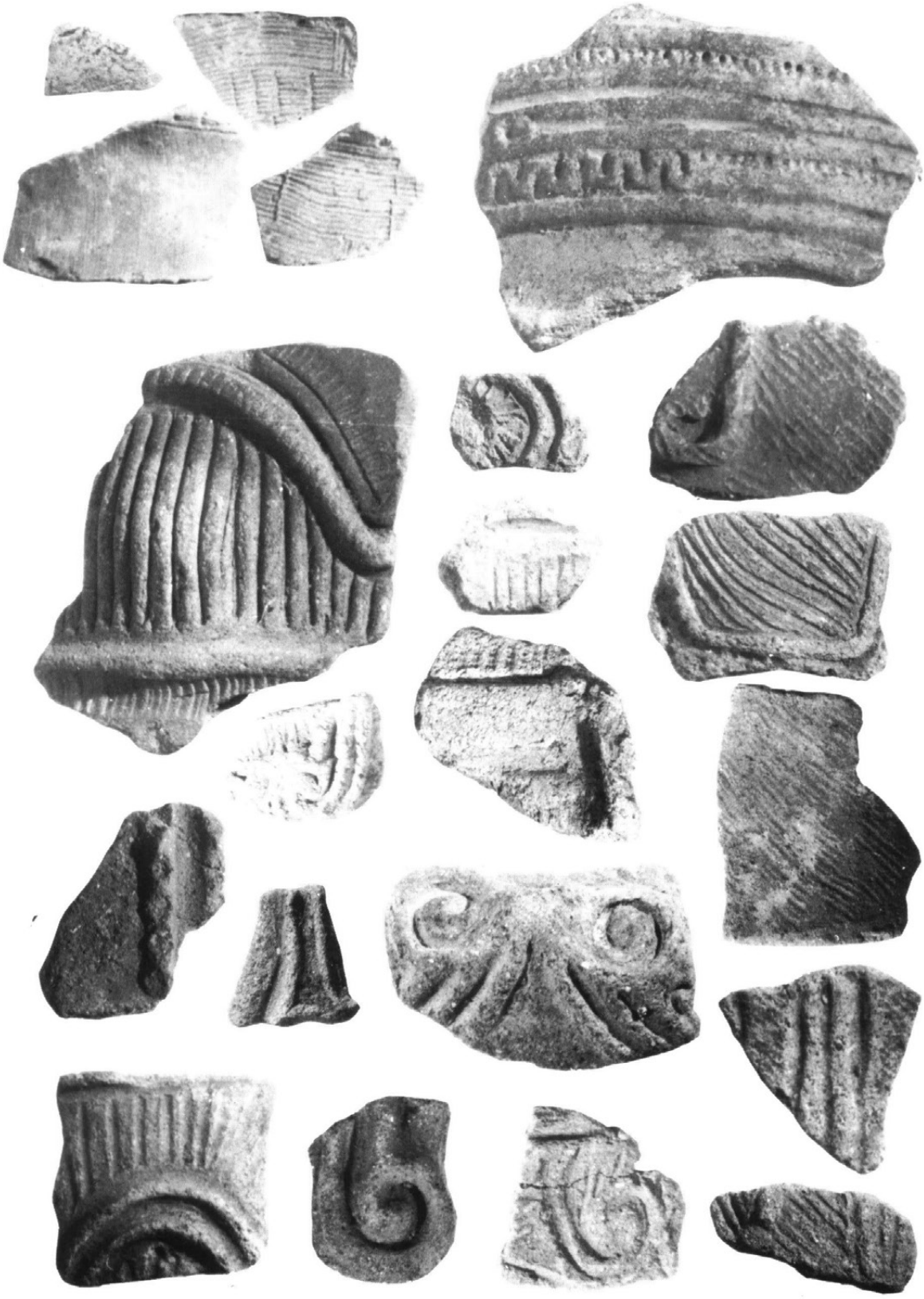


27　滝の宮遺跡



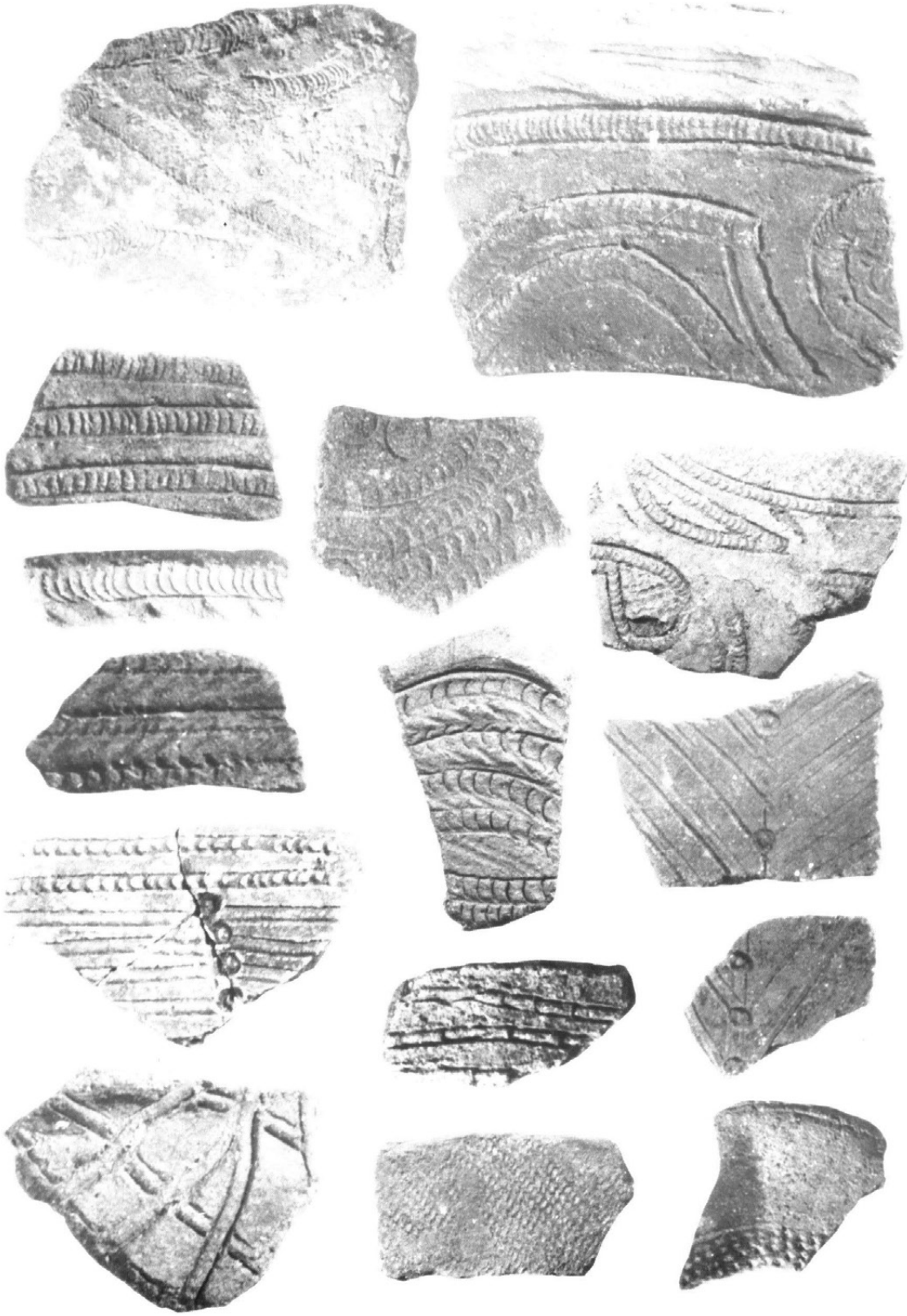
上段　29　下あそ遺跡
下段　33　善鬼堂遺跡

34　馬場遺跡

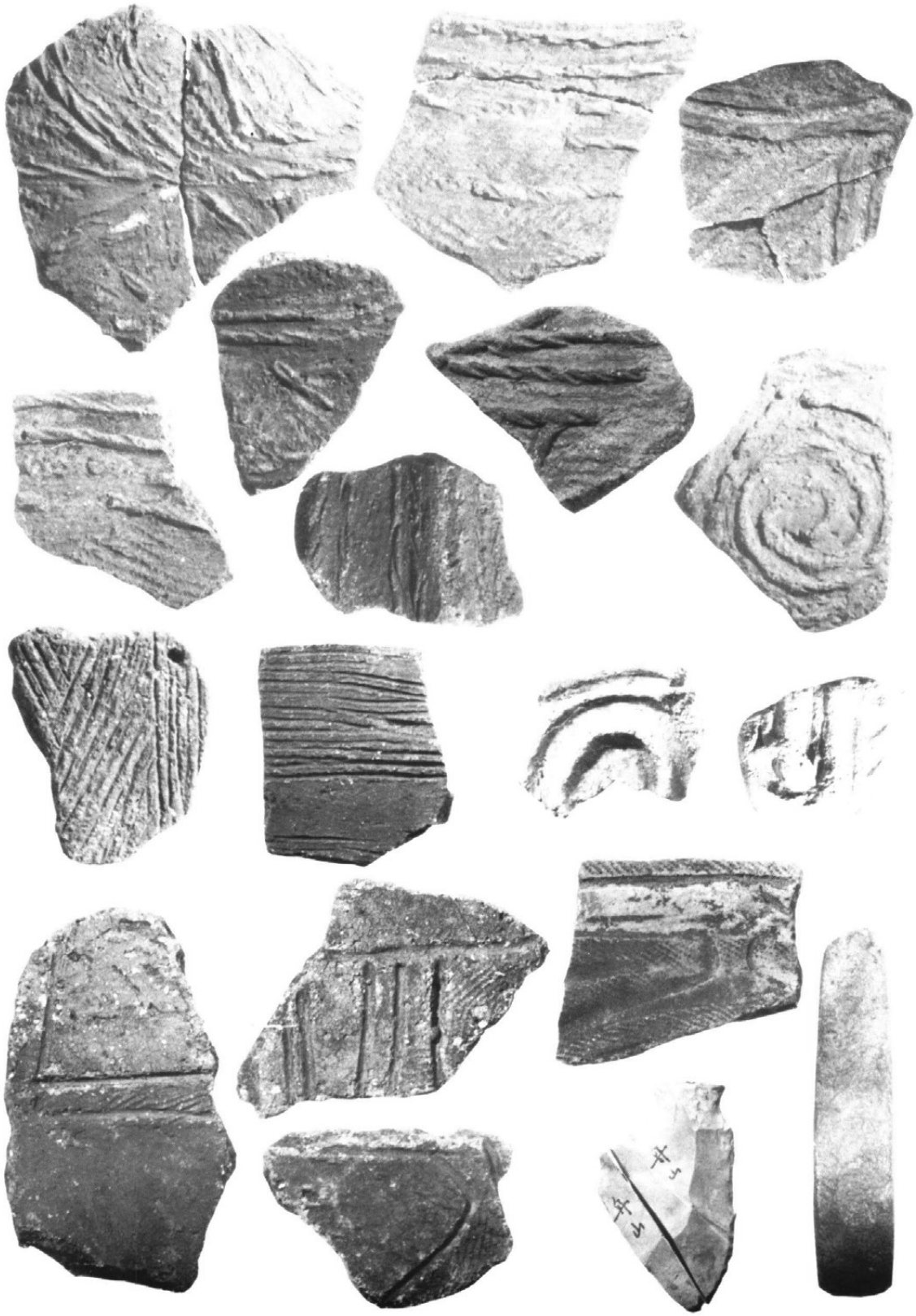


上段　左端　35　下くれ遺跡
他　　36　豆　田遺跡

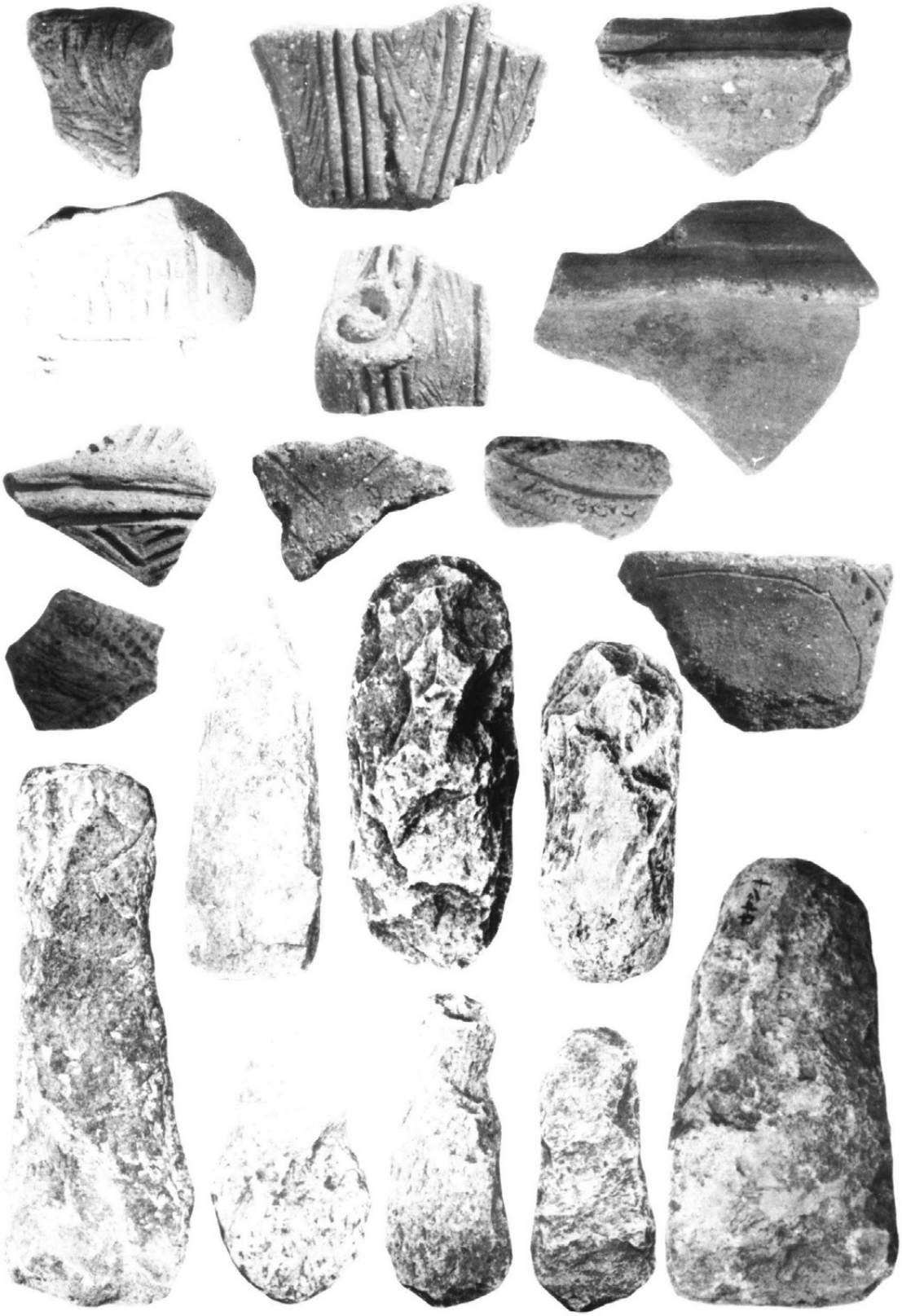
上段　36　豆田遺跡
下段右　37　屋敷遺跡



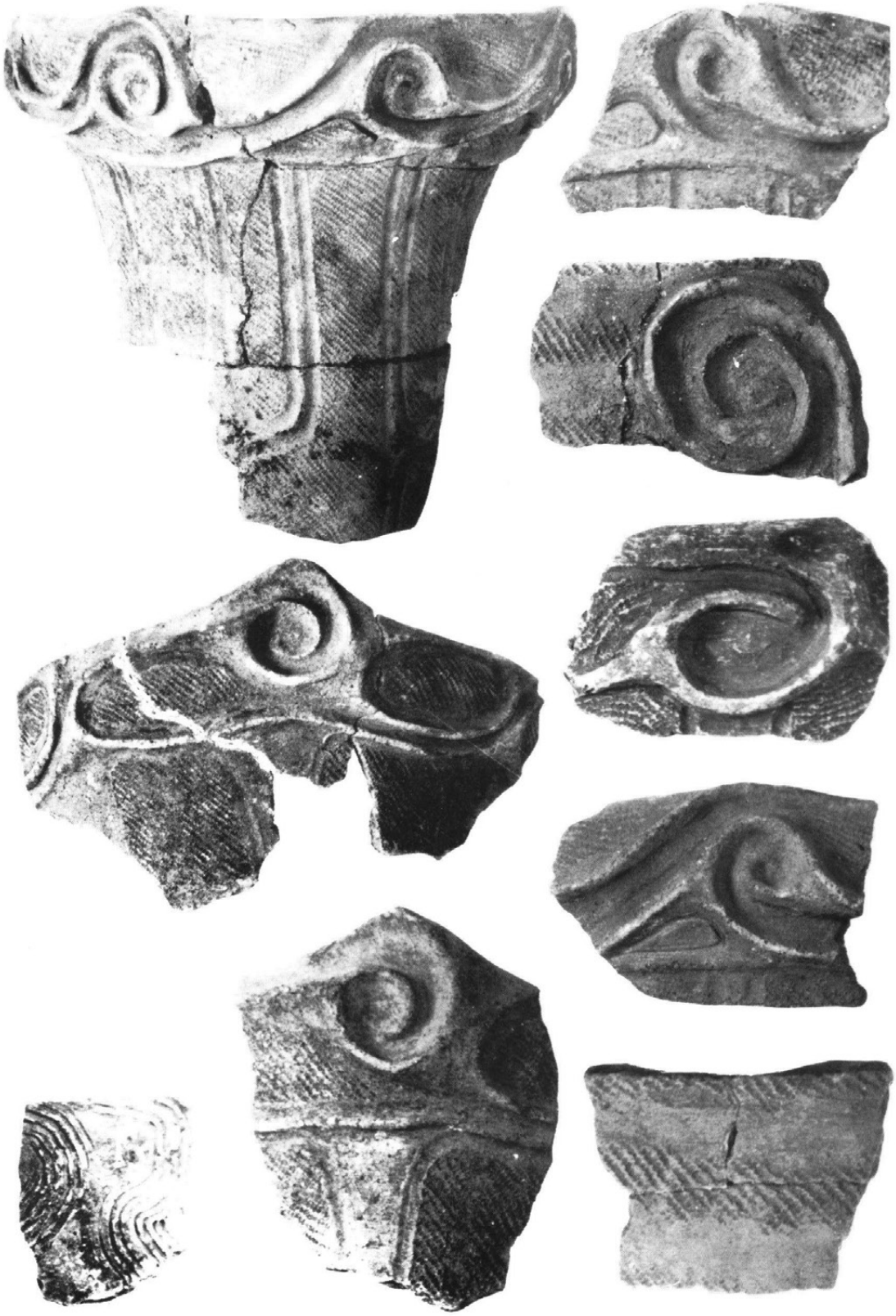
38 船 山 遺 跡



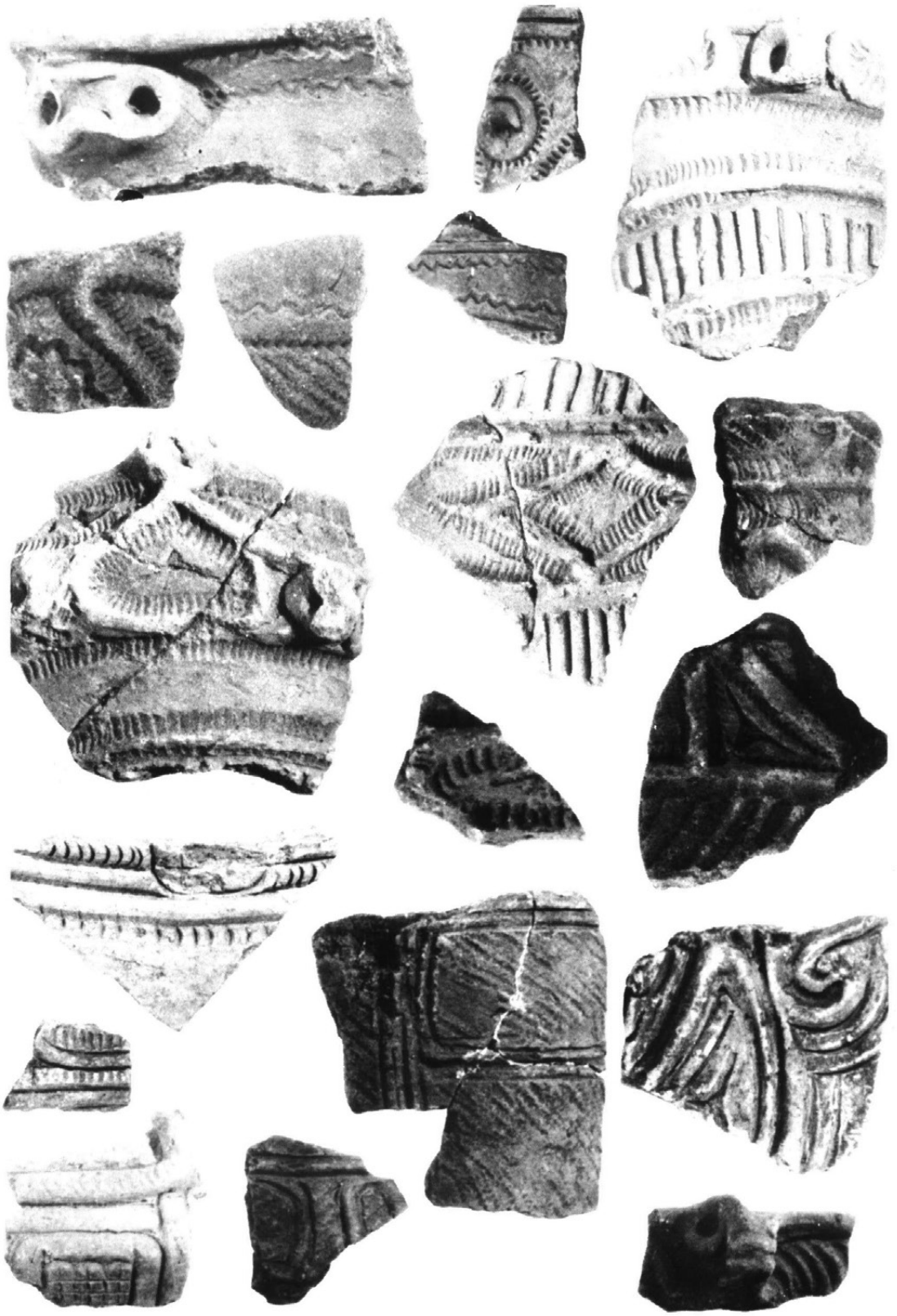
38　船山遺跡



39 古屋敷遺跡



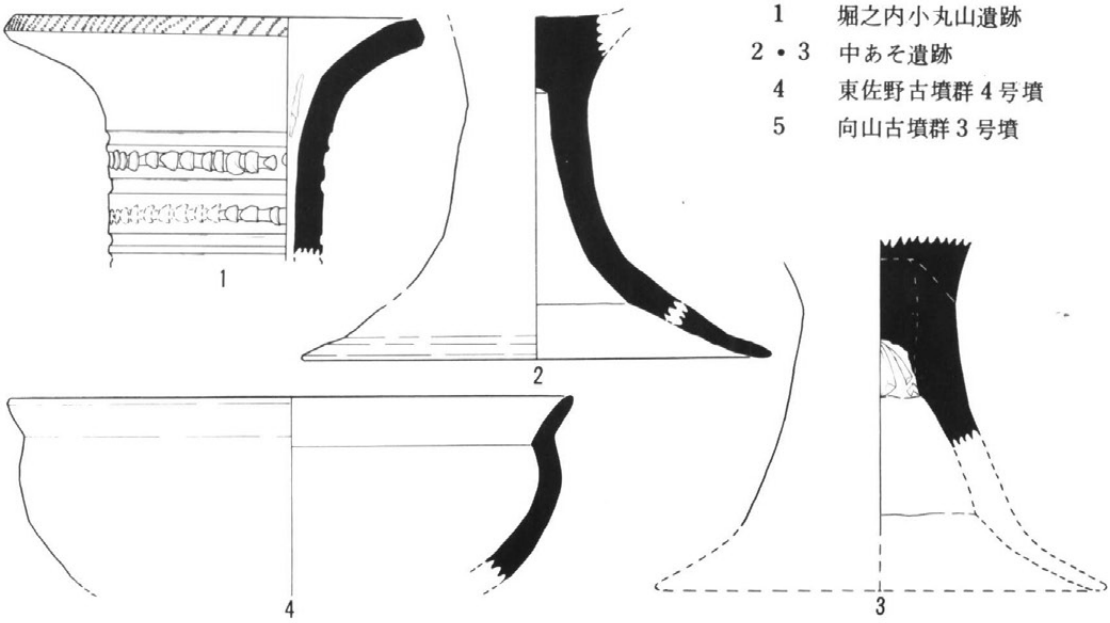
40 堂 平 遺 跡



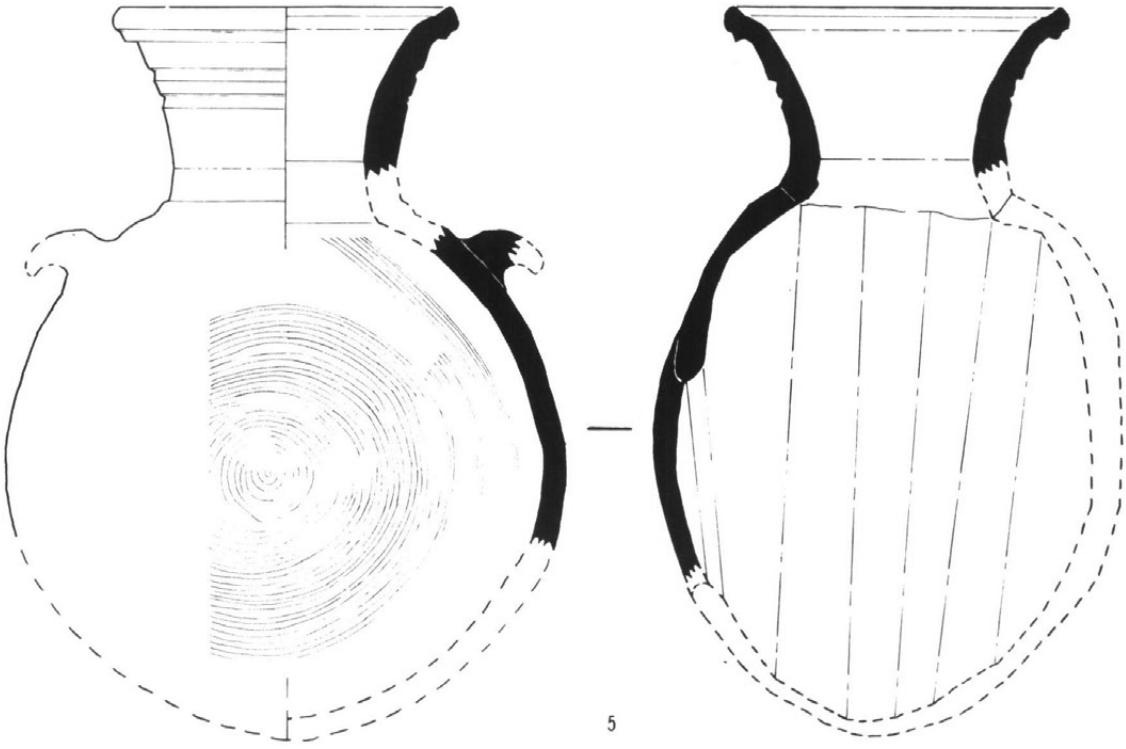
40 堂 平 遺 跡

上段　40 堂 平 遺 跡
下段　左８－４　東佐野４号墳
下段　右10－３　向　山３号墳

1　堀之内小丸山遺跡
2・3　中あそ遺跡
4　東佐野古墳群4号墳
5　向山古墳群3号墳



（1／2に縮尺）



白馬村内出土遺物実測図

（実物大）

結　　語

昭和７年、信濃考古学会誌に載せられた、江口善次の北安曇郡石器時代遺跡地名表には、白馬村の遺跡として、舟山・幸田・嶺方・蕨平二ヶ所の５遺跡が報告されている。また昭和31年の信濃史料には11遺跡。それが今回の分布調査によって37遺跡になった。

このように多くの遺跡が見出されたのは、開発が進んで、今まで土中に埋もれていた遺跡があらわれてきたこともあるが、何といっても、今までの個人的な、散発的な調査にくらべて、計画的・組織的調査が行われたことによるといってよい。またその間の学問の進歩ということもあって、さきの調査に増して一段の詳細さや具体性を多くしており、この村の古代のようすを知る手がかりが、より多く、より明らかになったことは間違いのないことだろう。

縄文や弥生の遺跡数は上記のように確実に増しているが、古墳の場合は少し事情がちがっている。大正10年の春日賢一の報告が信濃教育10月号に載せられているが、白馬村の古墳が21基。昭和31年の信濃史料には18基、今回の調査では25基というように、それほどにはふえていない。これは古墳が地上に姿をあらわしていることから、人の目につきやすく、昔から認識されていて、新しく発見される余地があまりないこと。また古墳と認定するか否かについて、調査者の間に若干の考え方の相違があると思われること。開田その他の理由により、破壊されてしまったものが相当数あると考えられること。などのことがらからみあって、新しく古墳と認められたものの他、失われてしまったのもあり、その数に出入りがあったのである。

古墳は今後のより徹底した調査でも、新しく発見される可能性は少ないように思われるが、住居址などの遺跡は、まだまだ発見される可能性を持っている。殊に村の西部の扇状地々域は、後世の氾濫のために、未知の遺跡が地中深く埋没していることも考えられるし、落倉の原のように、広い原野になっているところは、今回調査でもほとんど手が出せなかったという事情もある。

今回の調査で、最も成果の上ったと考えてよいことは、神城地区の湿原周辺で、いくつかの弥生時代から古墳時代にかけての遺跡が検出されたことである。

昭和27年故大場磐雄博士が、松本平の弥生文化は、越後から姫川をさかのぼって入ったのではないか、という問題をもって、白馬村・小谷村の遺跡調査をしたことがあったが、つい両村のうちに弥生遺跡は検出できなかったことを記憶している。しかし今回の調査では、いくつかの遺跡と遺物を見ることができたのである。

およそ8000年に及ぶ長い期間にわたる縄文時代は、さらに細かく土器型式による編年がなされており、またラジオカーボンデーティングなどによって、絶対年代の把握も、次第に可能になってきている。

白馬村の遺跡をみると、同一遺跡から長い時代にわたる、いくつかの型式の遺物が出土していることがわかる。（一覧表参照）これはその土地が生活に適した土地であることを物語るものであるが、縄文時代と弥生時代以降とでは、遺跡の立地がはっきりと切り替っているのに気

付く。このことは狩猟や採集を主な生活手段とした縄文時代から、稲作もすることを知った弥生時代になって、稲作に便利な水辺に住むようになったと考えてよい。また遺跡は現在の村落からひどく遠い地点に離れて存在するものは少なく、ほとんど村落の中や近接した地点にあるので、遺跡に住んだ人たちはその村の祖先に当るのではないかと考える人も時たま見受けられるが、広い展望に立てばそういうことを言えなくはないが、直ちに血縁関係のようなものを考えるのは早計である。

白馬岳に露頭をもち、小さな転石として、いまも姫川やその支流の河床で拾うことのできるものに滑石がある。この石を加工してさまざまな身体装飾品を作ることが、縄文前期末葉におおいに盛んになった。あるいは当時の宗教的感情の表出かも知れないが、その意味あいは十分に解明されていない。この現象は船山遺跡に異常に滑石製品が多いことが注目された、昭和5年頃からの課題といっていい。またこの山の滑石の分布を追うことにより、当時の社会の有様の一端が知られる可能性もあるだろう。

同じように白馬村や小谷村に多い蛇紋岩が石斧の材料として、あちこちに運ばれていることも同様な問題を含んでいる。

今回の分布調査に先立って実施された、北谷地小丸山遺跡緊急発掘調査は、この地方の弥生時代の研究に大きな寄与をするものであったし、調査と併行しておこなった東佐野4号墳の確認発掘も、この地方の古墳文化を考える上での貴重な知見となった。松本平にある古墳としては、決して小規模なものではないこの古墳が、内部施設を全然持たない無石郭古墳であったということについて（恐らくこの村の他の古墳も同じ様式であろう）われわれは、ここに葬られた村落の支配者と思われる人物が、未だ十分に権力者として成長しない段階にあったために、村民を駆使して、やや離れた平川から石材を運び、石郭を構築することができなかったのではないだろうかと考えた。また生産性のあまり高くないこの地方での経済力の弱さを考えることもできよう。今後究明さるべき問題であろう。

最後に埋蔵文化財保護の問題について一言ふれておきたい。

白馬村では過去に忘れられない破壊が二件起きている。ひとつは神城地区土橋古墳群におけるものであり、もうひとつは東佐野の白山城址が圃場整備事業のためにつぶされてしまったことである。いずれも開田という生活問題にかかわることで、止むを得ないことではあるが、せめてわれわれが事前にキャッチして緊急調査を実施できたならと悔まれる。

そこでそういう事態を防ぐ方法として、打つ手は二つあるように思われる。ひとつは文化財保護についての知識の普及である。どこにどんな遺跡があるのか、また遺跡を発見したならばどうすればよいのか、についていろいろな機会を利用して地教委が教育活動をするのである。知ることは保護につながることであろう。その二は、何かの事業が行われるとき、そこが遺跡に当っていないかどうかを、チェックする体制を確立しておくことである。村役場のシステムの中で、事業の確認や認可が行われる段階で、チェックすることは可能であると思われる。

さらに付け加えるならば、学校教育の中で児童生徒に、文化財保護の考えをしっかりと植えつけ、盗掘の悪であることを教えむことも必要であろう。

不十分な分布調査ではあったが、この作業や報告書が、白馬村の埋蔵文化財保護のために役立てば、調査に当ったわたしたち団員一同のこの上ない幸せである。

参考文献

江口善次　北安曇郡における先史時代遺物の分布　信濃考古学会誌　2の56

〃　石器時代地名表　〃　3の1

藤森栄一　玦状耳餌を出せる諸磯式遺跡　〃　2の1・2の2

八幡一郎　晩秋の旅　〃　1の3

今井真樹　北安曇郡北城村船山遺跡　長野県史蹟名勝天然記念物調査報告　6

江口善決　北安曇郡北城村幸田遺跡及び出土品　第1次信濃　2の3

春日賢一　北安曇郡の古代遺跡　信濃教育　大正10年　9月号

〃　北安曇郡の古墳　〃　10月号

塩島照衛
原　嘉藤　細野古屋敷遺跡発掘調査報告　信濃

白馬村遺跡詳細分布調査体制

名称　　白馬村遺跡分布調査委員会

役職名	氏名	備考
会長	武田　功	教育委員長
委員	松沢俊一	教育委員
〃	森　道雄	〃
〃	郷津　勝	〃
調査員長	篠崎健一郎	白馬北小学校
副調査員長	松倉　豊	大町北小学校・白馬村文化財保護委員
調査員	畑田　充	白馬高校
〃	金原　正	〃
〃	田中欣一	白馬中学校・白馬村文化財保護委員
〃	百瀬長秀	
補助員	柏原孝吉	白馬高校生
〃	武田明子	〃
〃	松本　渉	〃
〃	山本雅己	〃
〃	北沢久秀	〃
〃	西沢義嗣	〃
〃	山岸洋一	白馬中学生
〃	熊野正実	〃
〃	篠崎真一	〃
〃	今井宗人	〃

補　助　員	太　田　広　人	白馬中学校生
〃	藤　沢　　剛	〃
〃	花　沢　直　樹	〃
〃	矢　口　良　夫	〃
〃	横　山　幸　人	〃
〃	横　山　　章	〃
〃	山　岸　弘　司	白馬北小学校生
〃	山　田　和　英	〃
〃	花　岡　洋　司	〃
〃	伊　藤　　剛	〃
事　務　局　長	丸　山　克　治	教　育　長
事　務　局	福　島　信　行	教育係長
〃	松　沢　　衛	社会教育係
〃	太　田　　忠	〃
〃	吉　沢　美代子	庶　務　係

あ　と　が　き

この調査を始めてもう一年が終ろうとしている。忙しい人たちばかりの調査委員会で、本当にあわただしい日々の連続であった。一年という限られた月日の中で集めた代表的な遺物と主要な遺跡の景観写真を集録することで、一般の人がみてもわかりやすいような方法を取ることにつとめたつもりである。調査報告をするにあたっては、長沢武氏（大町市山岳博物館調査員、村文化財保護委員）より玉稿を頂くことができたし、さらに実地調査や遺物の実見に当っては地主の方々をはじめ村民各位、村内学校の児童生徒諸君からもご教示、ご協力を賜わった。厚く御礼を申し上げたい。当初、北谷地小丸山・八方古屋敷・東佐野古墳群等の発掘調査結果等もあわせて発表したいと考えていたが残念ながら時間がまにあわなかった。今後、この調査を土台として、ぜひ発表の場を設けたいと考えている。

白馬村教育委員会

白馬村遺跡分布調査報告

白馬の文化財第一集

編集・発行　白馬村遺跡分布調査委員会
白馬村教育委員会

印　　刷　北辰印刷有限会社

北辰印刷納
大町市大字大町4048
☎(02612)2－3030